

KODAK

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

LICENSED PRODUCT

White

Magenta

Red

Yellow

Green

Cyan

Blue

Black

3/Color

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

15

B

17

18

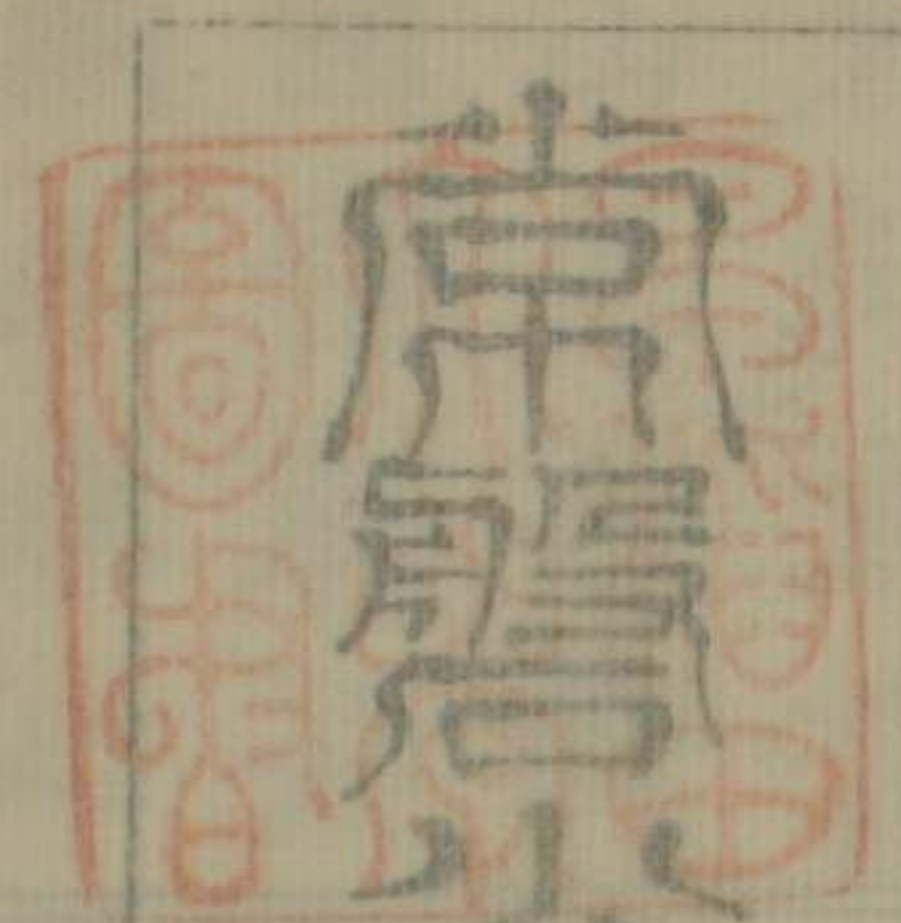
19

常磐公園攪勝圖誌

ル 4
3592
1

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

三



席盤小園體籀圖誌

卷之四
籀文
席盤小園體
籀文
席盤小園體
籀文

席盤小園鹽膳圖誌

卷之四
席盤小園
鹽膳圖誌

三



昭和八年
二月三日
小田島大
長男長郎
不家贈



叙園書矣。其神必辭於其
古之奇書必出於名山之藏矣。則
名山宜蓄奇書。而奇書宜藏于名
山也。今我偕樂之為園。山明水媚
固稱勝地。及於先君烈公修起樓
榭。山水之美益著。居然為東國之
名園矣。爾來遊于此者。非鉅公則
騷士。蠟屐恒盈焉。然而藏一編之

奇書。刪未也。豈非缺事乎。松平君雪江。夙善丹青。富文雅。頃者網羅凡係園之秘景。奇勝者。以為一編。名曰攬勝圖誌。書成矣。將奔諸園。以永其傳。徵弁言於予。予受而讀一過。圖也。巧足以遊目。誌也。詳足以騁懷。其快不啻瘡頭風。乃拍案喜曰。奇書矣。此可以補彼缺事也。

夫編奇而有所補。其可不目之謂之書中千金方也。嗚呼。可貴哉。世之抱好古癖者。得而讀之邪。於醫其癖何有。乃如彼泉石膏肓。烟霞痼疾。亦可得而療焉。則其可重豈止千金也已。即又目之曰不換金亦可矣。宜矣乎雪江之將以藏諸名園之金匱也。而在我名園。其亦

固可少此奇編手哉。於是乎叙。
明治十八年仲秋

水戸

陽軒 手塚惠進撰

一庵 名越敏對書



例言

一 偕樂園ハ世々天保己亥歲我水戸景山源公の闢
められたる園園ふしてに時の風光山水の明媚悉く
其勝況を盡し能はれ此書は載る所ハ拾う一ふて
凡此地は未遊する數客の多く耳目不觸するもの残
撰ひ出し其概畧残あるは
一卷中其勝景殘圖一併して當時騷人の詩歌殘題に
るものハ讀者代して坐するもの其勝概殘縮ん一何ん
ハ看るも倦むむ事残要に
一 此書其見聞せる所ハ隨て或ハ圖一或ハ記ハ又口碑子
傳ふる要其正し残るもの殘資り以て是殘輯録はあ
れども其間所同しうけるものあり今や之殘訂正ふ

遑^いま何^{なん}に恐^{おそ}らくハ謬^ご誤^ご何^{なん}ん看^み官^{くわん}夫^そ之^の代^{しろ}恕^{ゆる}せよ
一 此^こ書^{しよ}第^{だい}一^{いつ}卷^{けん}ハ園^{えん}中^{ちゆう}の概^{がい}況^{きやう}代^{しろ}志^し一^{いつ}第^{だい}二^に卷^{けん}ハ樓^{ろう}上^{じやう}の望^{ぼう}
中^{ちゆう}ハ何^{なん}仙^{せん}湖^こ濱^{ひん}水^{すい}の勝^{せう}境^{きやう}代^{しろ}掲^かげ係^{けい}せき苑^{えん}中^{ちゆう}の故^こ事^じ
代^{しろ}録^{ろく}也

一 好^{こう}文^{ぶん}亭^{てい}所^{しよ}藏^{ざう}の中^{ちゆう}ハ偕^{かい}樂^{らく}吟^{ぎん}詠^{ぎやう}と題^{だい}しる冊^{さく}子^し何^{なん}公^{こう}之^の
序^{しよ}代^{しろ}綴^{ずい}り當^{たう}時^じ翰^{はん}墨^{ぼく}の士^し代^{しろ}ておのく待^{まち}歌^かを記^きせし
む爾^{なん}来^{らい}此^こ園^{えん}ハ来^{らい}遊^{ゆう}する騷^{さう}人^{じん}雲^{うん}客^{かく}かをりて筆^{ふで}代^{しろ}情^{じやう}
ふく其^{その}餘^よ白^{はく}小^{せう}題^{だい}しるその積^つく数^{すう}百^{ひやく}首^{しゆ}ふりて今^{いま}その
勝^{かち}れしとれを撰^{せん}ひ此^こ書^{しよ}の續^つ編^{へん}とて而^{しか}りていはれ
稿^{こう}代^{しろ}脱^{だつ}せん後^ご日^{にち}代^{しろ}侍^じく梓^し行^{かう}を金^{かね}し

編者誌

常磐公園攬勝圖誌上卷

水戸松平俊雄編述

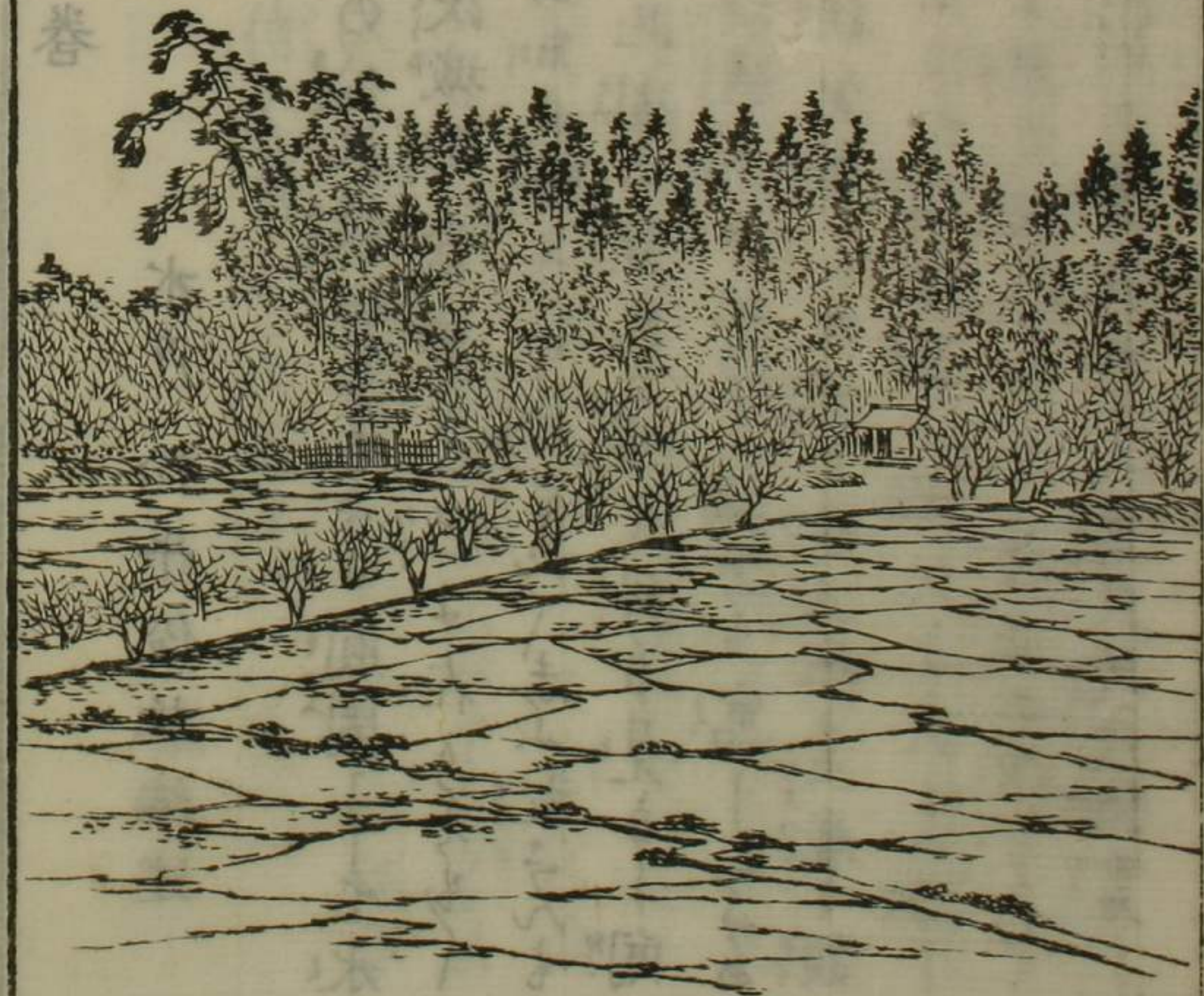
總説

偕^{かい}樂^{らく}園^{えん}ハ我^{われ}水^{みづ}戸^と景^{けい}山^{さん}の公^{こう}に設^せけらるる園^{えん}園^{えん}とて水^{みづ}
戸^と城^{じやう}西^{さい}武^ぶ拾^{しつ}餘^{じよ}町^{ちやう}東^{とう}茨^い城^{じやう}郡^{ぐん}常^{じやう}磐^{ばん}とて邑^いは在^ありて
此^こ公^{こう}の政^{せい}績^{せき}ハ遍^{へん}く世^せ人^{じん}の知^ちる所^{しよ}ふて今^{いま}くもたれさんも
煩^{わづ}ハけしハ黙^{もく}止^しハ唯^{ただ}此^こ園^{えん}の就^{しゆ}れ始^{はじ}え終^{はつ}り見^みり聞^き
もあつる事^{こと}ども書^か列^{れつ}子^し將^{しやう}其^{その}土^ど地^ちのさるを寫^{しやう}しあ
て貳^に卷^{けん}とて遠^{えん}近^{きん}人^{じん}の技^ぎを曳^ひく此^こ園^{えん}ハ遊^{ゆう}ハ多^{おほ}く土^ど産^{さん}ヲ領^{りやう}
ち與^よへる何^{なん}く斯^{しか}ハその一^{いつ}つ偕^{かい}此^こ園^{えん}の開^{ひら}けとえりハ世^よに
天^{てん}保^ぽ十^{じふ}一^{いつ}年^{ねん}庚^{かう}子^し公^{こう}封^{ふう}土^どは就^{しゆ}せ給^{たま}ひりてり校^{がう}威^いの四^し方^{ほう}を
とほけ修^{しゆ}文^{ぶん}構^{かう}武^ぶとろ川^{がは}の業^{ぎふ}代^{しろ}おし人^{じん}導^{どう}れ民^{みん}代^{しろ}撫^ぶ育^{いく}し



東北より借樂園茂
望む園

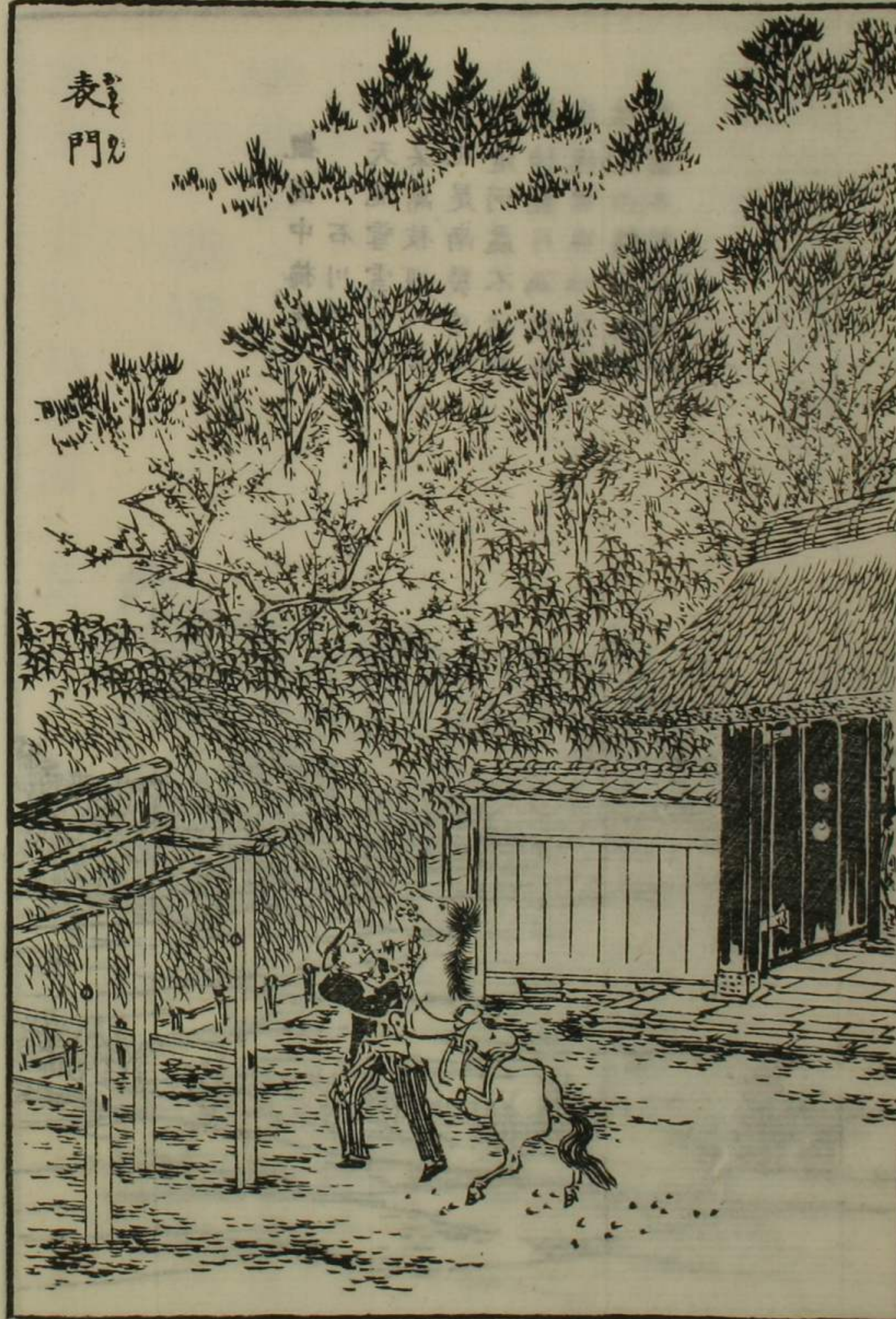
常樂公園群衆園結土巻



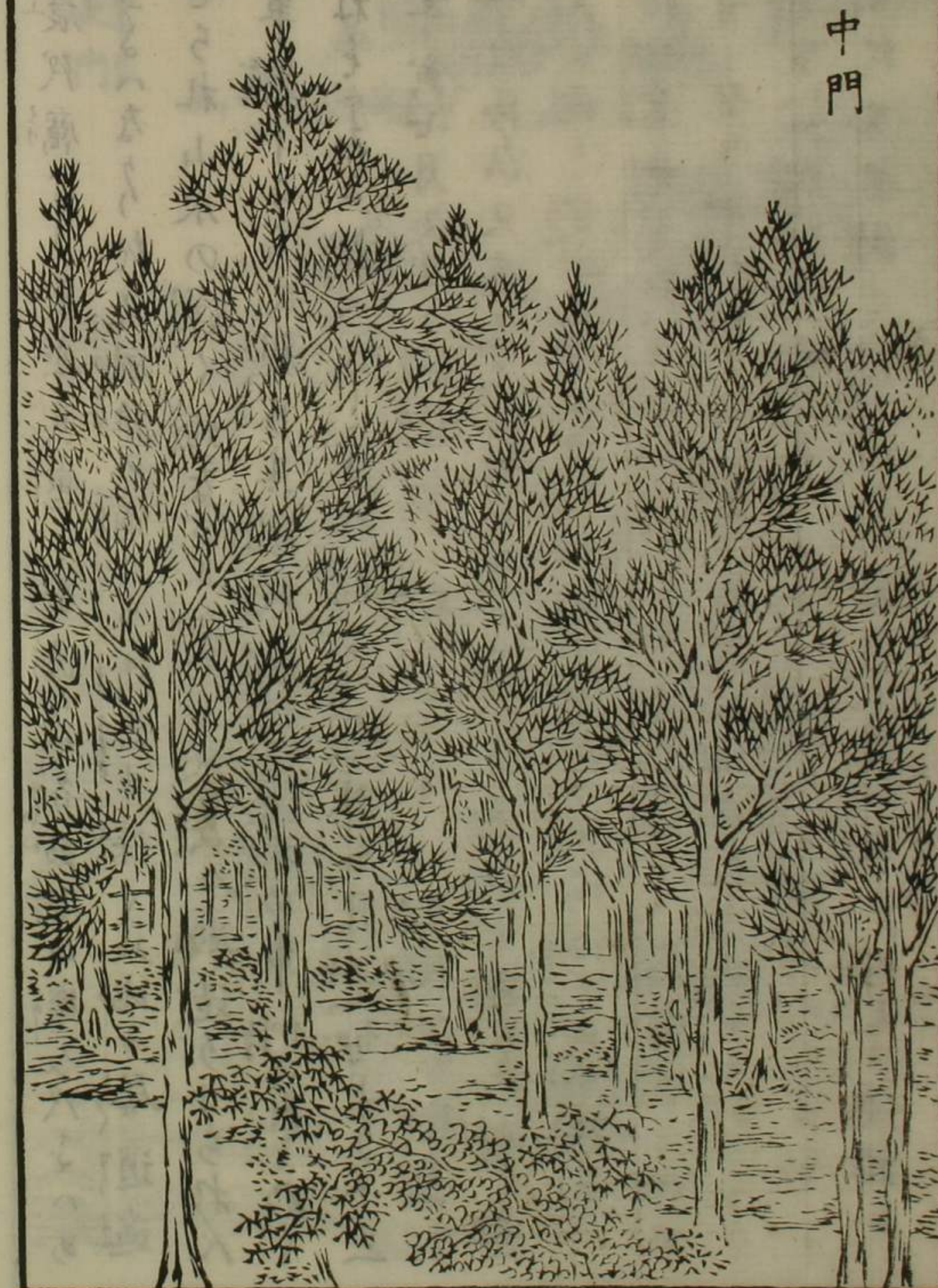
觀園中梅花
晴天飛雪
千朵萬枝
是北是南
何處不寒
花神籠月
冰魄聯珠
水酌山觴
半塵不到
此仙鄉



表門



農政厲す一衆庶其惠を被りて各鼓腹の樂み代々ハめ
ざるハなかりた又風雅の道ヨリ所志一深く此地ハ屢逍遙
せられ山水の渾く妙なる小愛く此處ハ殿造りせられん
事思一うて親ら其圖代畫た土木の事何れを那く
ねとろふ教へさるれ同十二年丑五月中旬より十三
年寅七月に至り延宮全く就く亭代好文樓をハ樂臺と
呼せ終ひ又其事實代ハ碑ハ鐫りて園中ハ建られ永く遊
息の地と定めらる當時此地ハ七面の祠有り一戎西隣見川
村妙雲寺といへる小遊一又其近ハ遊り常磐邑の畑地
有るをも撫地賜りて一郭ハ籠られ梅樹数千株をうめり
芝生ハ秋萩幾根となく植付く漢土の賢人ノ言葉ハ
源氏儋樂園とハ号けらる是ハ東武の水戸邸より後園代



西山公の後樂と稱せられし一園にせられし、明治の初
代となりて藩を廢し此地も官に收む然る代公の遺蹟
次不極に傳へしや、同六年朝廷の御許を受く公園と
なり思されし司園吏代置る苑中の事取扱はせ總て
舊時の儘より改めし同十六年更に維持の法代りしけ
縣廳の職員高議して各俸給の内幾分代募り以て修繕
の料とす又春秋二季職員好文亭は會して宴代開
く是を樂壽會と名付恒例としたり

好文亭表門 戊辰は向ふ前ハ筑波街道より川和岡
鯉淵穴戸等への通路より門より内正面は木戸より是れ
入りし中門迄の間凡武百間許道の左右杉林よりその
際取し作置しなり此園を開くあり山城州男山

の竹伐りつされしと又表門の内左右土塁のうえは
繁茂せる矢條も同時に植付けられしものより武用
の一途よりなぐられしなり當時此竹伐用のより弓箭代製せり
れり事なり

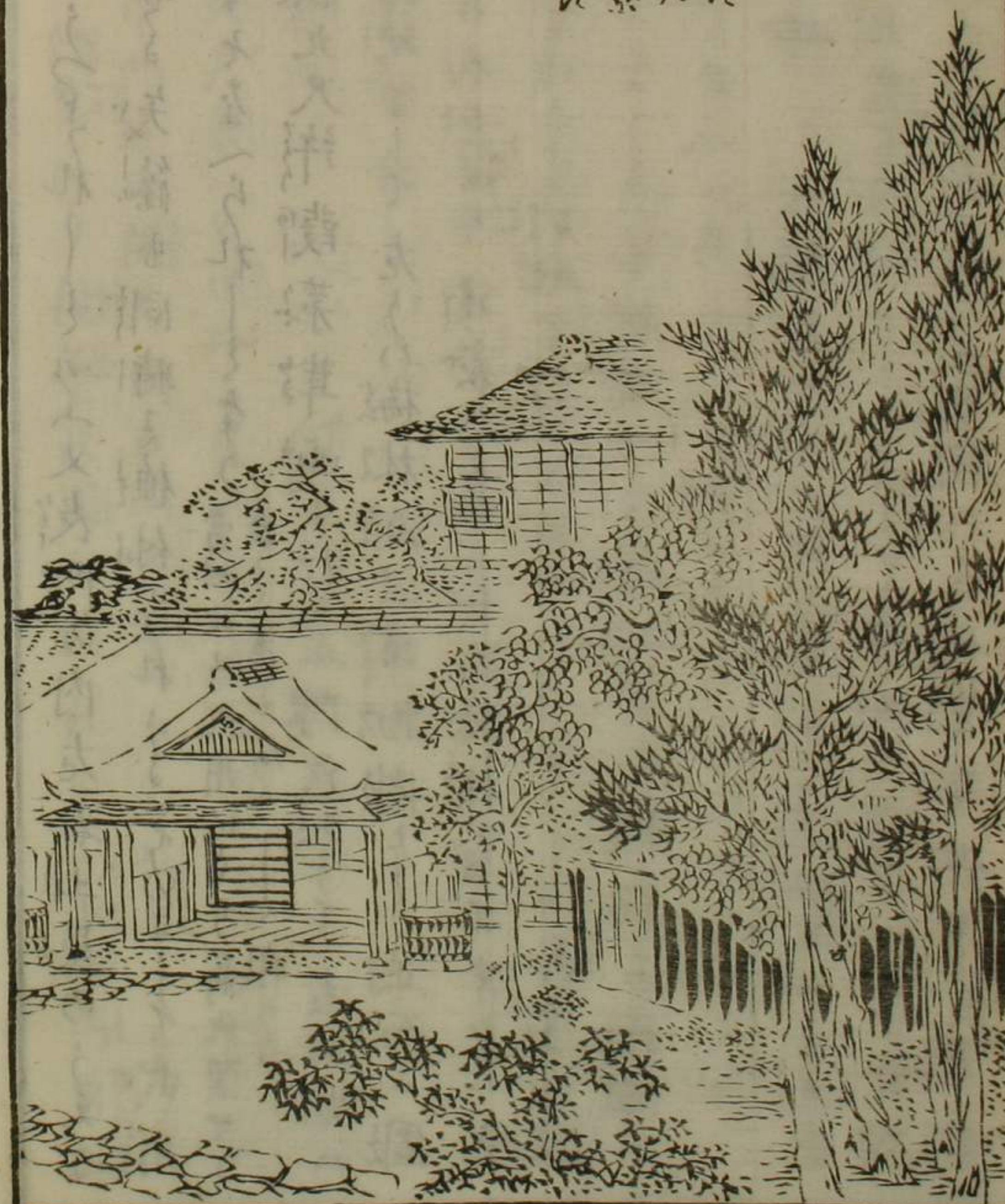
中門 横九尺許葭茅葺西より門伐入りて右のがハ
玄關跡地より左りの梅林及び植物園なり正面は園
内入口の木戸より建家へ入り武拾餘棟有て半は上
市柵町よりが殿を引せられしものなり其後公園
となりしより是迄破壊せし場所代に撤毀し修繕の
料代都りれ今其三之一を残せり

偕樂園の碑 玄關前の木戸伐入り少く阪路を下り又南
より折る凡そ三拾間よりより碑石の前より自然
の平石より高サ八尺三寸横八尺石質堅硬より色靑



洞通環

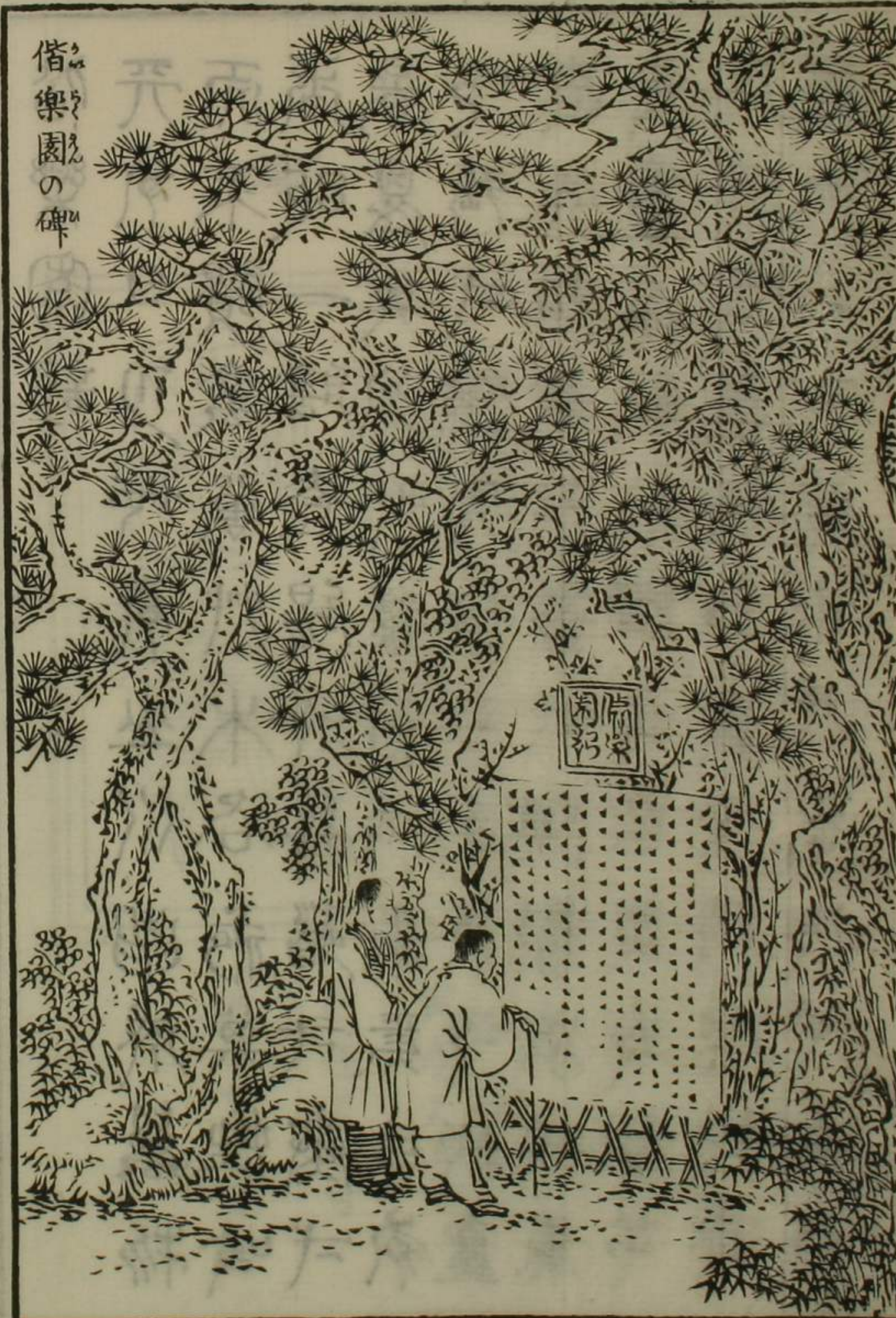
玄
閣
今
廢
こ
ふ
ハ
舊
時
の
景
況
因
り



五

性天茂帽點養莫鄉食物同
 德黃其鄉蟲物異尚所飲絳其
 鄉赤蟲物何助異哉故病心然
 房伸續過相得而禽莫性命者
 其然而為氣食或不至齊是引
 蕪引勤其業是具習助相鏡者
 此續食四嶺引快其德優游外
 於不善助藥水尺令引韋尚吾
 新習昧越齋於華鼎藥者子習
 此抑綴不此虱白語曰性相

偕樂園の碑



問所可謂華藏故曰苟得此藏
物不致黃若莫養其楊不消是
夾百災此謂也然則非夾不可
霖灑息心園吳明吟所必此
曾點出車此機夏諺良有即其
果繼此後則莫我熄元應形帽
鵲後何時元可快風莫吟吟夢
晨餘醺月夕尚學文止餘心教
應由經驅歡山向尚講序此暇

心余直城西外監觀正壁西望
璣峯南蜀嶺湖尺城南此麟景
皆藥芳麟此則縹緲絳庚尺弓
子用攢翠壘白穴瞻知式元坐
可謂穠仁式劑此樂解其除是
蕭機對鬱子林即縹緲宵此璧
又修式來白靜介白一歸非腐
即供仰園芳暢此所蓋夾解傳

十

偕樂園記

天有日月。地有山川。曲成萬物而不遺。禽獸草木各保其性命者。以一陰一陽成其道。一寒一暑得其宜也。譬諸弓馬焉。弓有一張一弛而恒勁。馬有一馳一息而恒健。弓無一弛則必撓。馬无一息則必殪。是自然之勢也。夫人者萬物之靈。而其所以爲君子或爲小人者何也。在其心之存與不存焉耳。語曰性相近。習相遠。習於善則爲君子。習於不善則爲小人。今

偕樂園

園中より東
南の間千湖
茂平臨むる
図

其の比借楽園上

福祿美靜

おすらゐ

水

能之而辭

4
 5
 6
 7

圖乃

127



財東理直鄉西育蘭橋
驪鳩山谷昔昔為之邦
必其
佐々木重之景煥繼其

佐々木重之

煙林濃淡鎖邱原
宦苑不知塵世喧
柳影花光涵水面
斷崖奇石露松根
勝遊寧問輶川境
豪興豈誇金谷園
竟日逍遙幽邃地
歸途試欲覓仙源

以善者言之。擴充四端以修其德。優游於六藝以勤其業。是其習則相遠者也。然而其氣稟或不能齊。是以屈伸緩急相待。而全其性命者。與夫萬物何以異哉。故存心修德。養其與萬物異者。所以率其性而安形怡神。養其與萬物同者。所以保其命也。二者皆中其節。可謂善養。故曰苟得其養。莫物不長。苟失其養。无物不消。是亦自然之勢也。然則人亦不可無弛息也。固矣。嗚呼。孔子之與曾點。孟軻之稱夏諺。良有以也。果由此道。則其弛息而安形怡神。將何時而可邪。必其吟咏華晨。飲醺月夕者。學文之餘也。放鷹田野。驅獸山谷者。講武之暇也。余嘗就吾藩。跋涉山川。周視原野。直城西有閭豁之地。西望筑峰。南臨仙湖。凡

城南之勝景。皆集一瞬之間。遠巒遙峰。尺寸千里。攢翠疊白。四瞻如一。而山以發育動植。川以馴擾飛潛。洵可謂知仁一趣之樂郊也。於是藝梅樹數千株。以表魁春之地。又作二亭。曰好文曰一遊。非啻以供他日芟渴之所。蓋亦欲使國中之人有所優游存養焉。國中之人如體吾心。夙夜匪懈。既能修其德。又能勤其業。時有餘暇也。乃親戚相携。朋友相伴。悠然逍遙于二亭之間。或倡酬詩歌。或弄撫管弦。或展紙揮毫。或坐石點茶。或傾瓢尊於花前。或投竹竿於湖上。唯從意之所適。而弛張已得其宜焉。是余與衆同樂之意也。因命之曰偕樂園。

天保十年歲次己亥。夏五月。建景山撰并書及題額。

碑の背面

禁	凡	入	界	以	波	園	園	漁
條	遊	後	女	厭	醉	中	中	獵
	園	天	史	威	醜	市	市	有
	亭	而	別	儀	暴	許	許	禁
	者	去	互		及	無	折	不
	不		正		俗	病	梅	評
	許		不		樂	者	枝	踰
	失		許		天	乘	采	制
	邪		羅		風	輪	採	
	而		沓		禁	實	實	

偕樂園

偕樂園 碑石の前代東より出れ、總て苑中より東北の間
 八皆梅林なり、東西凡て式百間、南北六七拾間、許より梅樹
 五千餘株より及へり、南の方ハ数子歩の芝生より秋萩或ハ
 種々の樹木伐植並へり、春秋の眺見最妙なり、就中萩躑躅
 伐てて壯觀と云、東ハ常磐神社の境外に接し、西ハ嶮岨に
 して下ハ一條の通路伐開け、機川の流るに臨む、又崖上ハ十
 株の老松あり、其下ハ石造の碁将棋盤式面伐設けて、觀
 客の游戲に供せ、号けり仙奕臺と云、此より東
 南の間ハ湖伐平臨する、小碧水渺茫として、妙法崎、梅戸崎
 へ北岸より沿ふ、常磐山の深林に連り、三魂ヶ崎ハ東岸に
 在り、濱田の市坊及び藤柄の人家を控え、吉田の杜、立原
 山ハ南岨よりして、静寂緑伐涵み、又遙々小磯濱の松原伐

園中東南より
樂壽樓を望む

偷閑來避暑
地僻遠笙歌
荷老幽香動
松垂涼意多
園林留鶴守
山雨送雷過
忽遇清風起
長吟破睡魔
小河逸齊



菊池為馨

八重雲吹く

風も匂ふなり

おくらあけ乃

みよみ

子

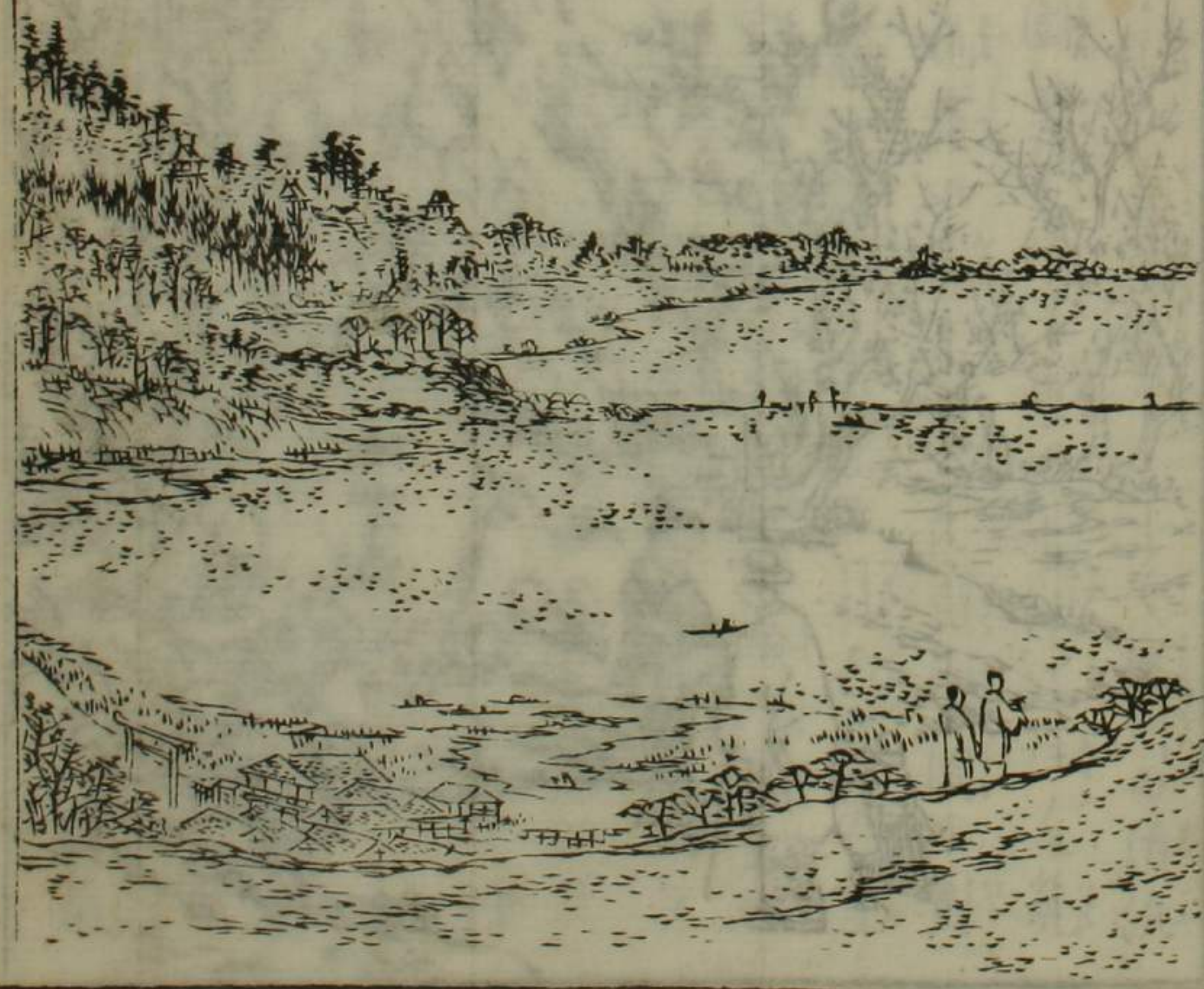
重之

仙閣超然對筑峰
飛樓懸棟出喬松
山光縹渺連天淡
水色琉璃接地濃



仙奕臺

石棋枰上幾回圍
落子丁々響翠微
恐他遊客傍觀者
不到爛柯終不歸





八景の碑

仙湖

望む西ふ顧みれば緑の岡の蒼松鬱々として極川の清流
 其南麓茂るより直ちに園下を徑る東流し湖に注ぐ筑
 波華穂の遙山連りて晚霞の表に聳え白雲岡に對
 ひて彌生の爛熳るを觀る就中中秋の月白妙の雪
 の晨に其眺をこころふに己んことす凡そ騷人墨客の
 眼を娛め心致をくけむるその皆顧間一瞬中より
 八景の碑 全所南の崖下は在自然石にて高四尺五寸幅三尺
 七寸景山公の隸体にて書れり仙湖暮雪の四大字は刻
 以公嘗て瀟湘の八景を擬ひ封内の勝地を撰ひ各所は八
 景を並く此地則ち其一に居れり斯謂八景は廣浦秋月
 東茨城郡 岩船夕照 仙湖暮雪 同郡 水門
 下石部村 村松晴嵐 同郡 青柳夜雨 同郡 太田落
 歸帆 同郡 村松晴嵐 同郡 村松村

苑下梅川の流る
俗に松を役け
常は遊ばし
釣魚網引入
等の用は供せられ
が今廢せり



雁久慈郡
太田町

山寺晚鐘

同郡
稻本村

等なり

右題字代表せし碑石

今も現存也

躑躅 八景の碑石より西の方梅川の流るを以て梅林の裏
を行く事凡一町餘より又北に轉り坂路代上り園内入
口の本戸有るれより内躑躅幾根もなく道の左右を横
みろ岩も浅く石も傍ふく大なるハ其丈七八尺に至るその
所り霧島を以て黄躑躅其種類多くて四月
中旬より其花咲きめて紅白交互に色競ひ一時の壯觀を
此内紫躑躅ハ花形も常のそのより大なりて世に珍らし遠く天保中公日光
社参りの所り同地よりゆかり参り苑中ハ樹木多しなり
吐玉泉 好文亭の前より西の坂路代曲りて降る事凡
一町半程より方七八間許平坦の地所り中央ハ寒水石炭
彫穿ちて造りたる井筒を幾け徑り四尺高サ三尺厚サ六寸三

躑躅

重之
薰風亦欲
譚豪奢爛
曼齊開躑
躑花樂壽
樓前紅錦
障仙人湖
上赤城霞



分底に礫敷敷正中は銅管より清泉涌出に常
井筒より溢るる側なる溝渠に入り田圃の用水と
寒暑増減を以て此地は七面の社より頃杉の大樹
その根がさより涌出る眼疾を患ふ者此泉は酒
て効驗ありと云傳ふ其後杉も朽倒れ此邊はさく荒
尋る人を稀なり一偕樂園を開れり折荊棘茂り
除く今この如く井筒は飲料に用ひらる事は成
りしと云ふ此地より幽邃ふし松杉蒨葳として枝
交へ常は日光に遮り暑を避るふ最も宜し
杜若白蓮 吐玉泉へ到る路の左少く池の形に作り杜若衆
種代るえ又其側なる溝渠は白蓮茂く極る又路より
右の方より黄檗一株より起る温暖の地はより少く生長で

吐玉泉



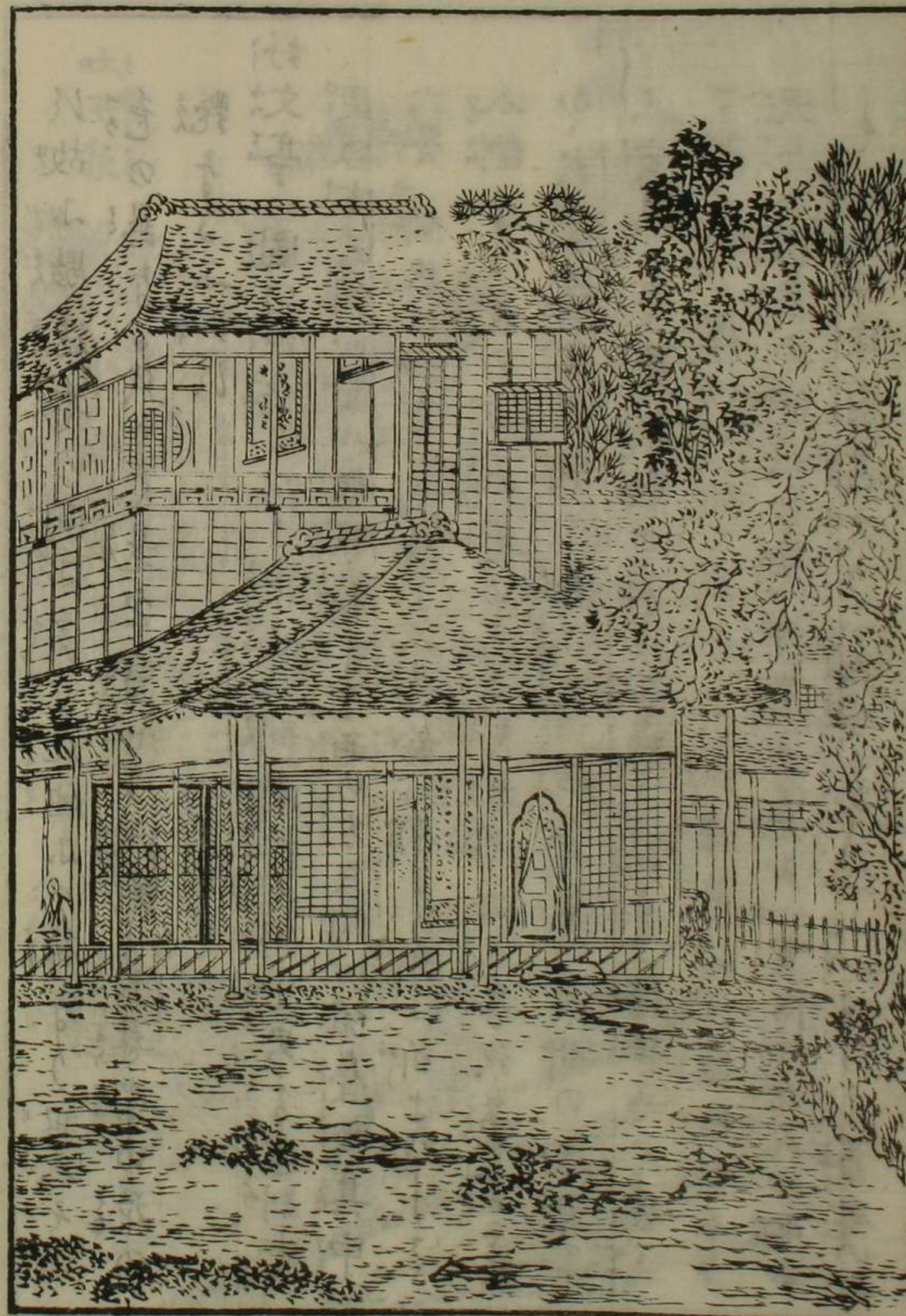
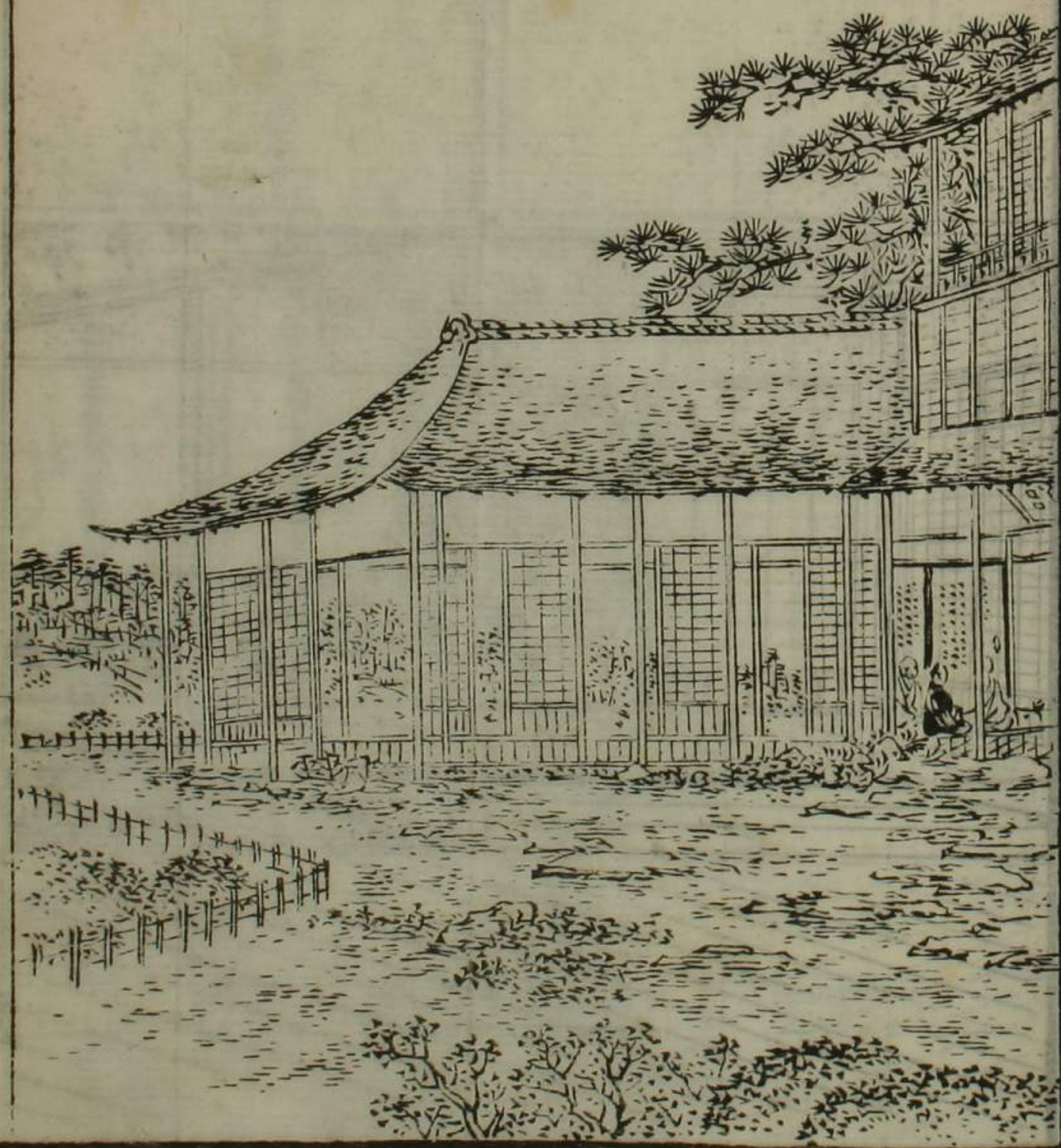
以故小駮遠冬の間は多く北地ふは稀なり世人その
色の異なる代りく是を賞せり然れども尋常の花の
艶なるふ如し

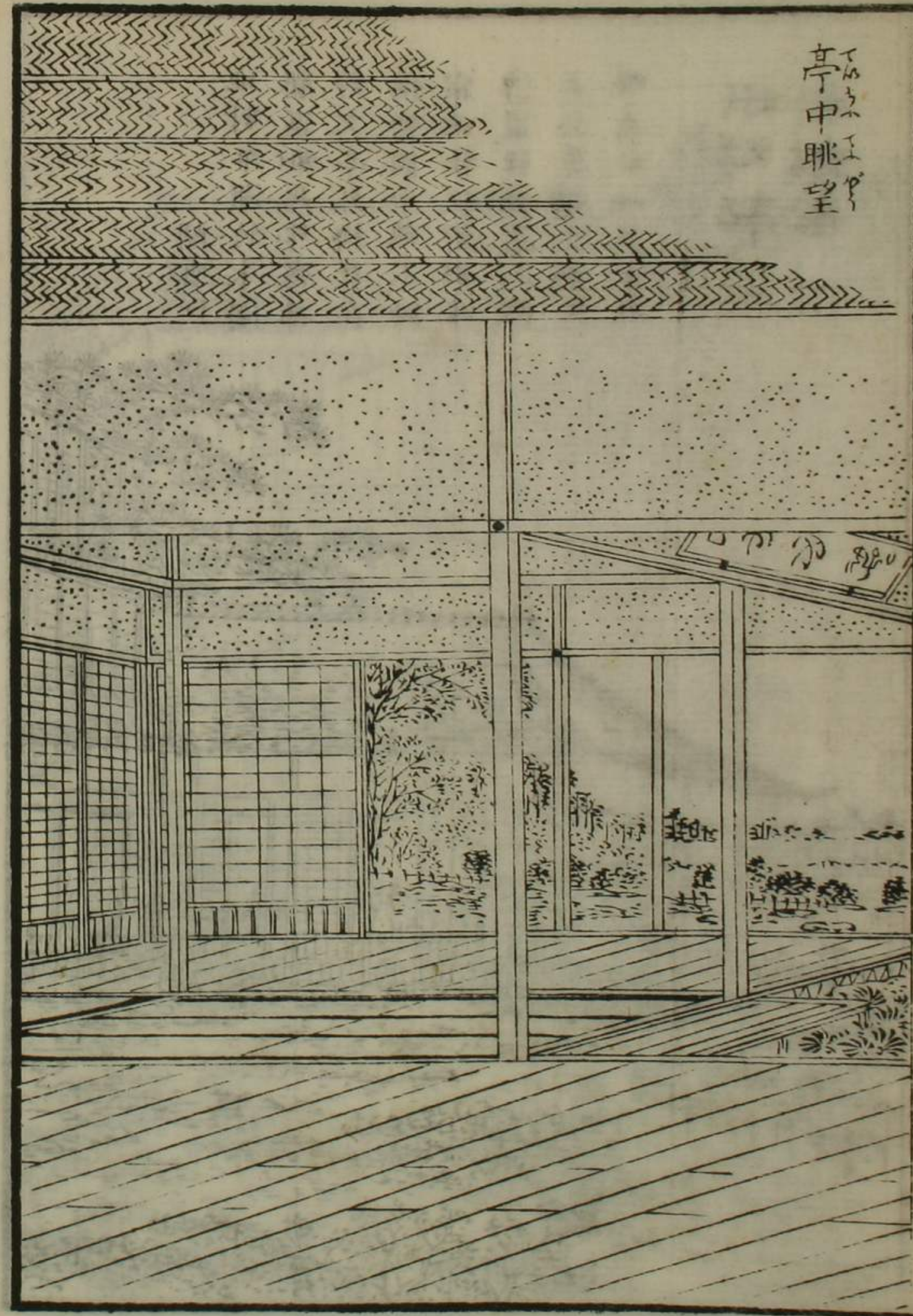
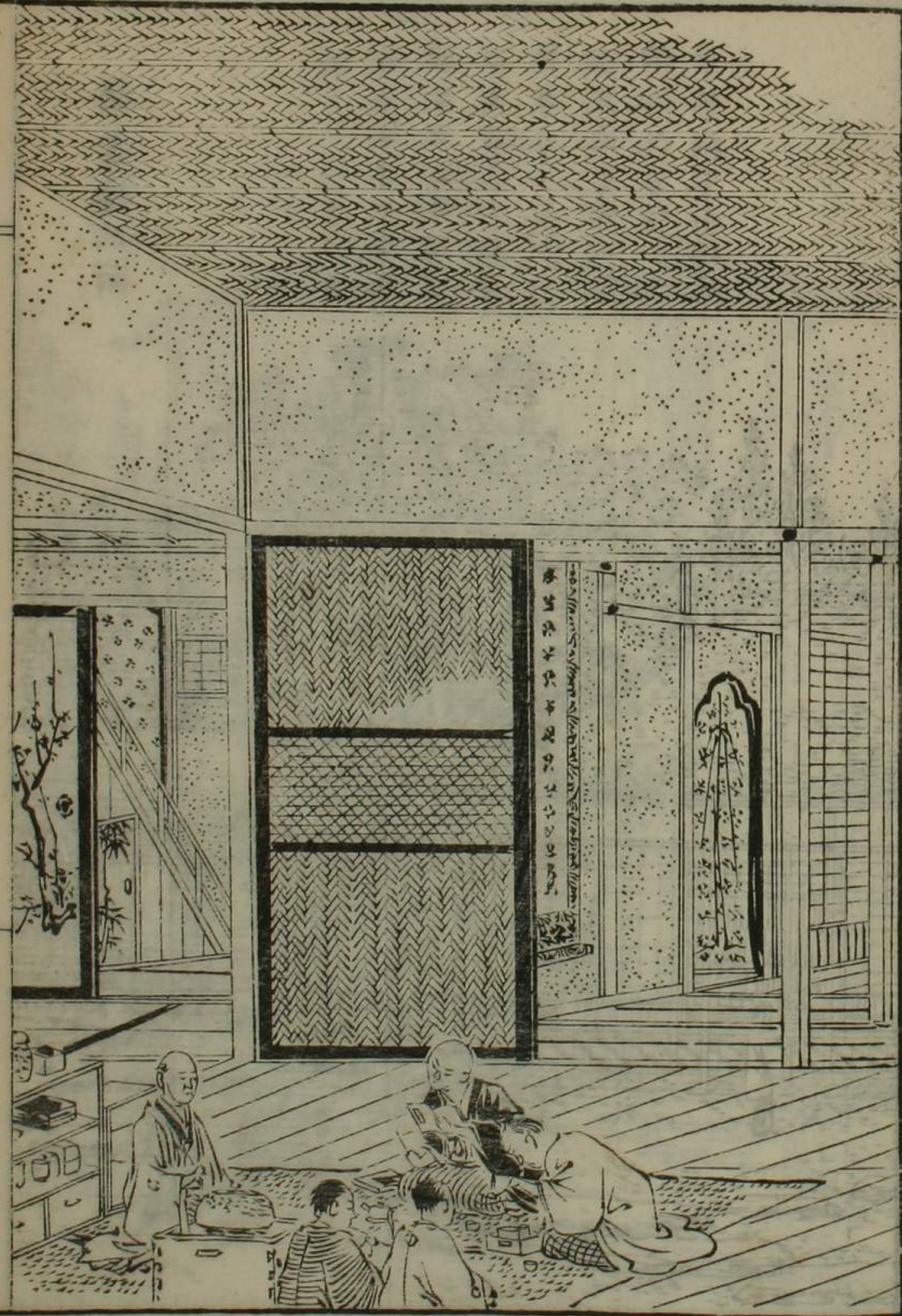
好文亭園の中央より東西六間南北三間中央より區別一
東の方三間四面ハ總板敷なり西の方三間四面疊敷其中
六疊一間依仕切り上段より其餘ハ南より北は折まハ一
入側なり表の方承塵の上は好文亭の三字代篆書と
かれり扁額依掲く景山公の親筆なり此間の後方
三室より東板敷の間と相通一此より階梯より橋上
より西は續ける一間ハ南北へ六間東西へ三間總板敷あり
天井ハ杉皮の網代依用ゆきより北は一室より九尺四面
より南向は床有其方りふ茶室へかよふ入口よりる承塵の上

好文亭
樂壽樓

地對平湖竹木圍
勝區如此地應稀
好文亭外梅長在
偕樂園中鶴不歸
宿雨初收新樹暗
浮嵐總動暮山微
王公舊謝空無主
唯有呢喃燕子飛

開雪江

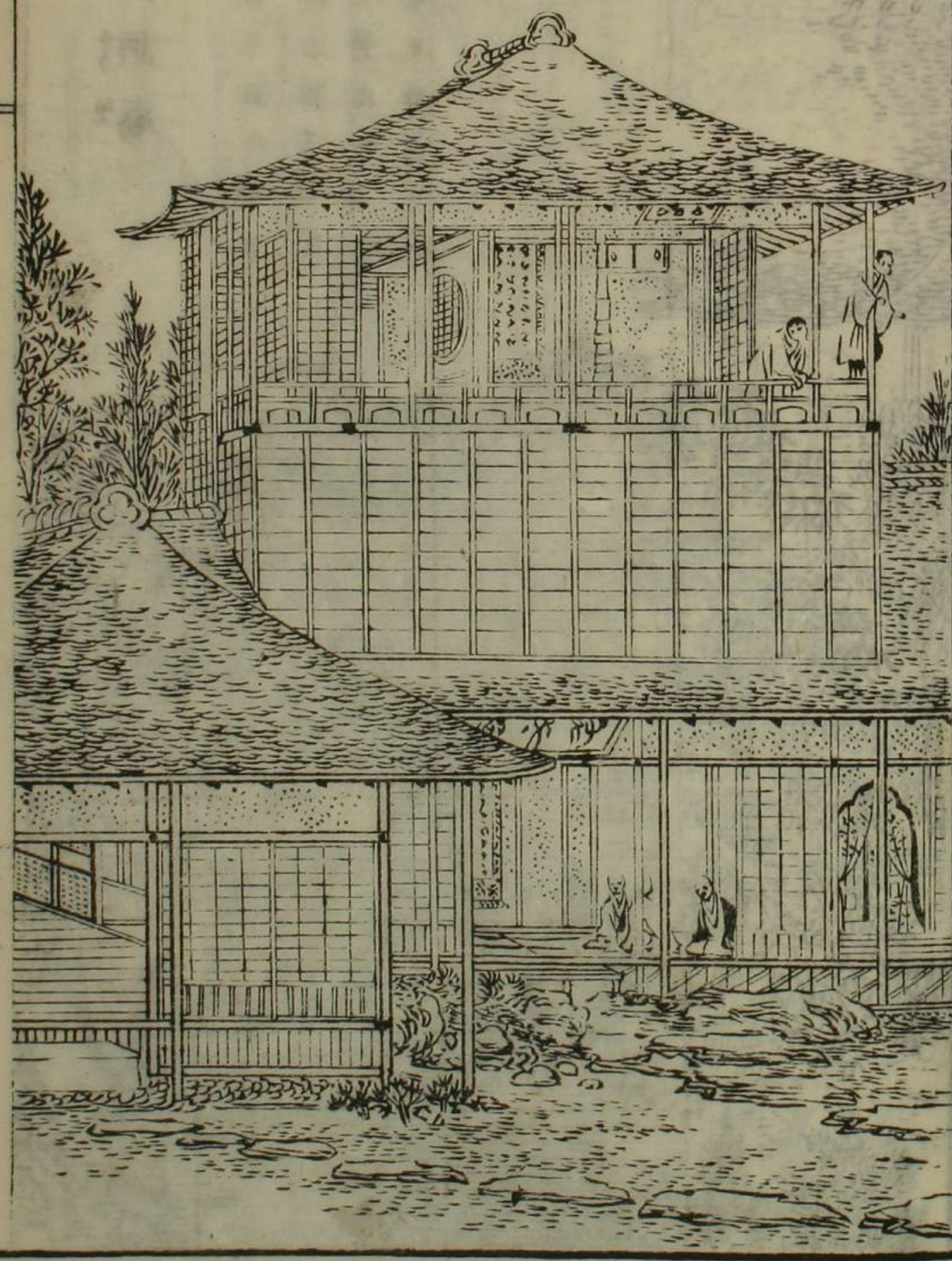


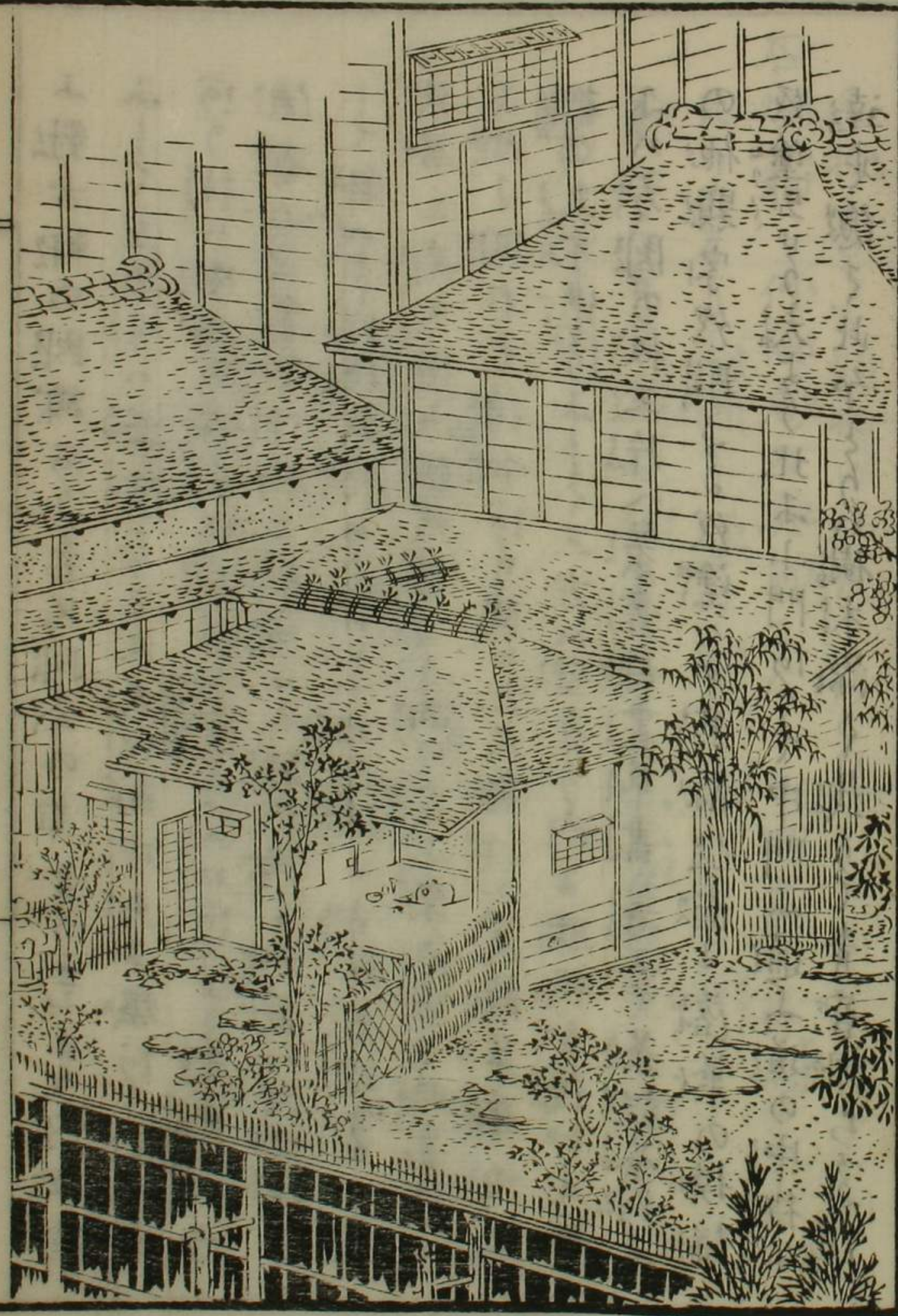


亭中眺望

樂壽樓正面

當年卜築費經營
聞說遊豫此拳觴
滕閣風烟供遠矚
梁園賓客聚群英
放鷹林古禽相集
調馬場荒草向榮
俯仰休垂懷旧淚
常磐祠宇自崢嶸



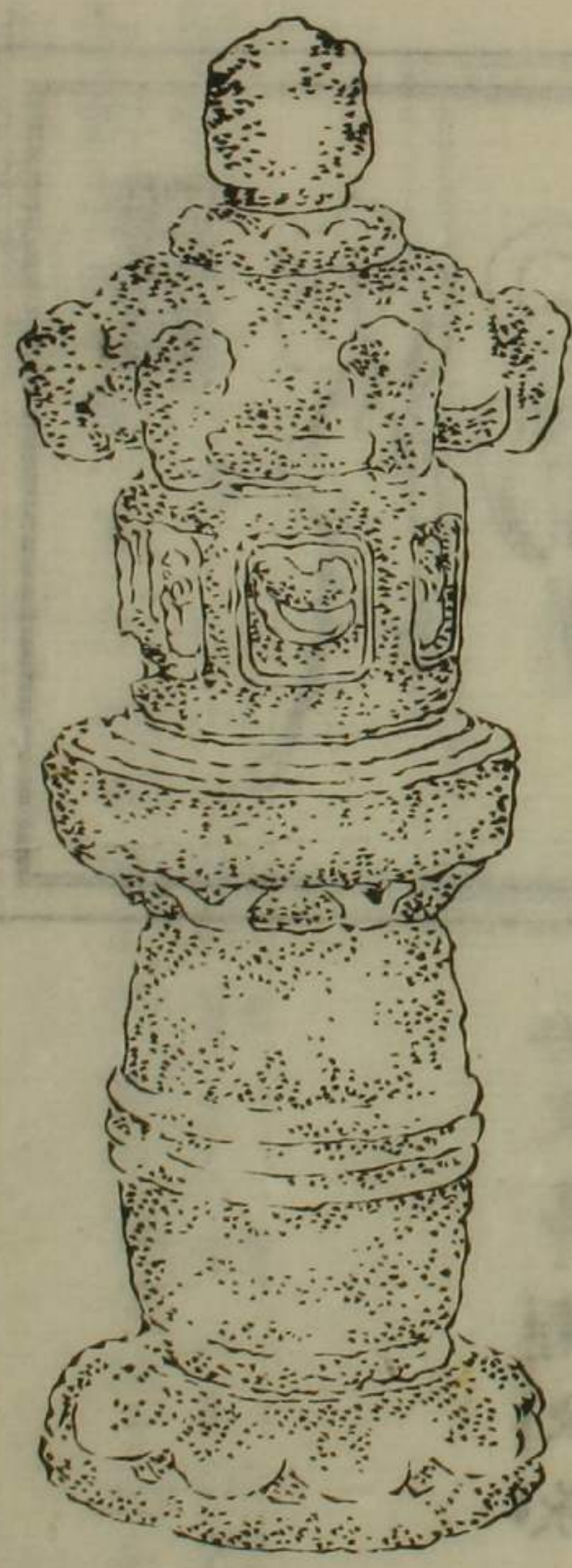


何陋庵

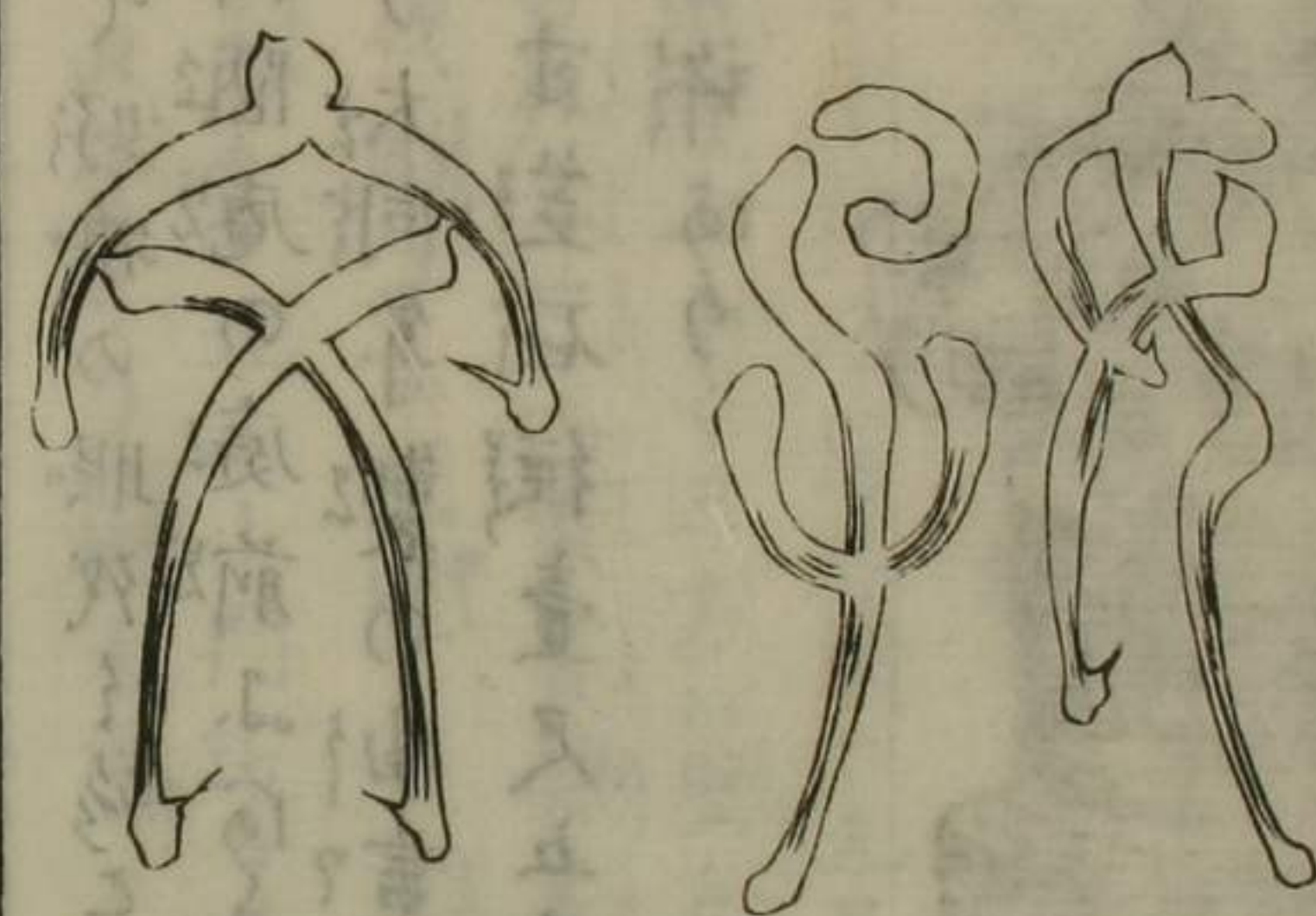
庭方立錡同蟬
庵總容膝等蝸
休言營造如斯
瓊室元非君子居

小對古軒の因額有り是又同公の畫なり是より内板敷
 ふして左の方ハ茶室なり九尺に面中央ハ爐有り南ニ床
 有り柱ハ躑躅の古木代用ゆ此表ハ入口有りて兼塵ハ何
 陋庵の三字を艸袴ハ彫成する額代掲く前裁ハ六坪并ハ
 して斜めハ竹垣代結めぐらハ北の隅ハ古石燈籠一基
 代居え南天燭五根代極う西の方ハ聚戸有り此代出
 て西ニ圓れむ待合有り間ハ九尺奥行六尺葎茅草總体
 柵の丸木造りふしハ三方ハ壁なり内ハ腰掛を設け又壁
 ふハ方圓の板三片ハ篆書隸書草書等して茶説茶對と
 の他題字代彫する代塗こめ其餘ハ一面ハ落葉の模様
 代塗せり夫より北ハ小門有りて中門ハ通ハ道の中程ハ
 達を總く此やとりハ樹木深く茂りて青苔滑らう自

石燈籠 何陋庵の庭前ハ有る石燈籠ハ異形にして古
 代ものなり大同年製の由言傳れとも詳うなりハ總
 高ハ尺五寸笠石徑壹尺五寸火袋徑壹尺棹石
 壹尺貳寸許有り

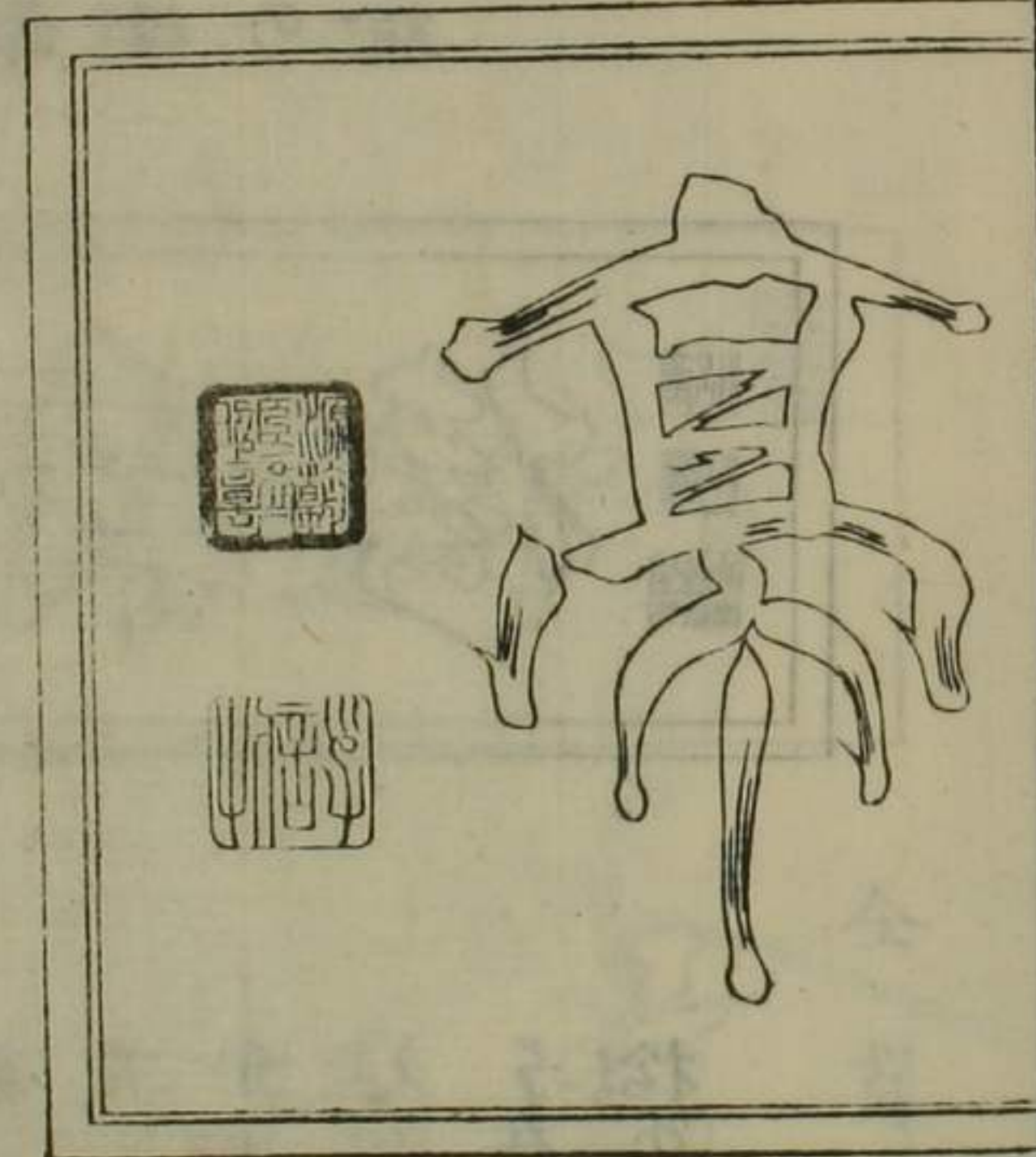


好文亭の額



好文亭南表承
塵の上は掲く綴
壹尺五寸横に尺
貳寸厚壹寸に分
文字彫下紺青に
て之代るむ地板

様の珠本理なり



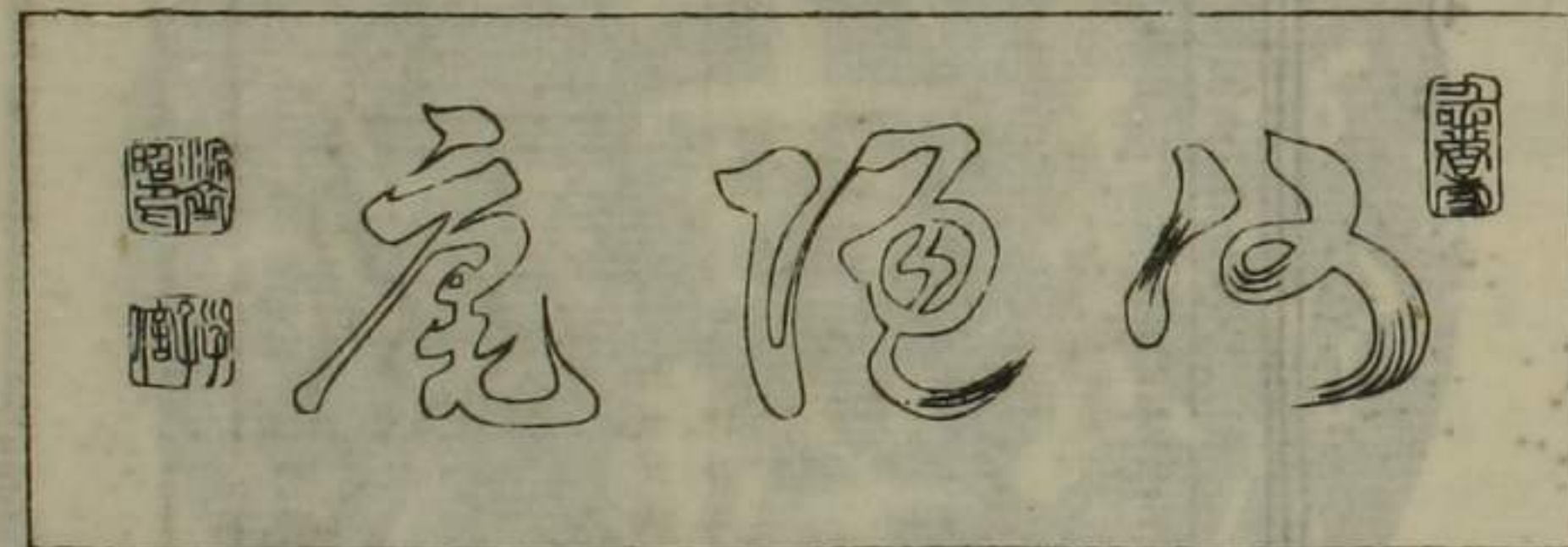
亭中の扁額ハ蓋く景山公の親筆なり中にも好文
亭樂壽樓の額ハ筆力健勁頗る飛動の勢あり故に
衆人の賞賛するところなり

樂壽樓の額



樂壽樓南あけ
承塵の上は掲ぐ
縦壹尺五寸様我
尺三寸厚壹尺壹
分檼板唐本色付
文字彫下糊粉よて
それを埋む縁本ハ
松の皮付なり

何陋庵の額



全背面

景山出利

茶室の表承塵
の上は掲ぐ堅九
寸様式尺三寸八
分地板杉の洗ひ
出よして文字すれ
うけ彫なり

水戸家小傳
 茶器殺子木の
 中子形河川滑雲
 新田眉付等
 の茶壺おもひ
 曜変をいふる
 天目ハ世に聞え
 るものなり又水戸
 哀烈ニ公ハ親ら樂
 燒の茶碗代製
 後士ハ顔出何人
 今小佛座焼杯
 つて人々代賞
 たり



對古軒の圓額



裏

景山社及重刻

對古軒より茶室に通
 へに兼座の上は掲ぐ地
 板唐木色付文字す紀
 下周徑り壹尺壹寸六分
 厚さ六分背は銘あり

對古軒



蝦蟆石

好文亭の簷下なる脱履石を云ふ縦八尺横に

尺五寸計有り蝦蟆の背に似たる斑文有るを以て斯號く

此石より同郡谷田村羅漢寺の境内に在り彼寺廢せ

し後この處より引せといふ

樂壽樓

好文亭の樓上は改竄しき東の板敷より北の

一室に入り階段は西より昇りて板敷より南の方より一小室を

此板敷より第二の階段は南より上りて樓上は達比北より南に

三間半の入側有りて東より廻れハ正室なり式間に面北より床

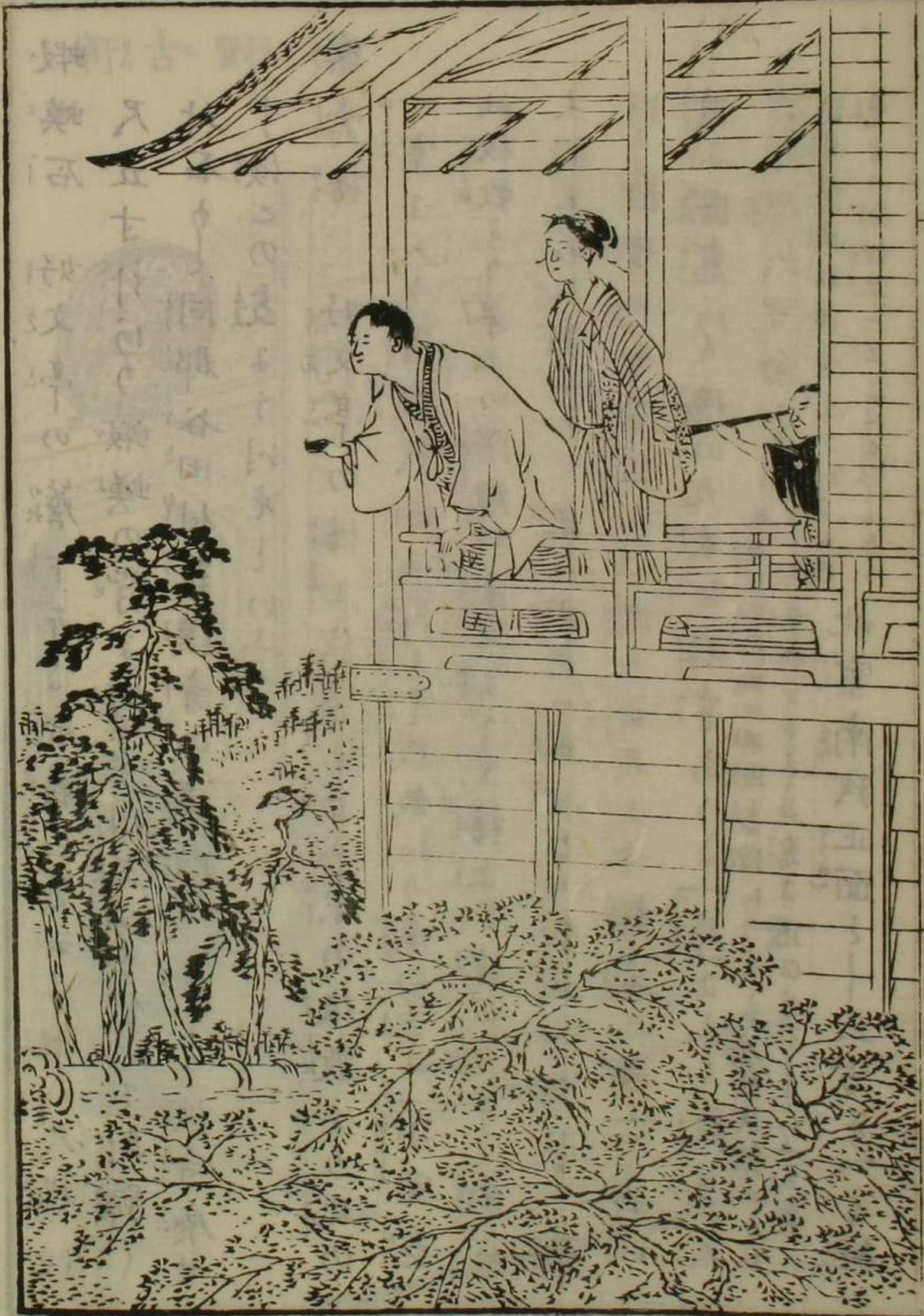
有り薩摩竹を床柱とて囲り式尺七寸餘床より添ふ西の

方より圓窓有り櫺の大本を用穿ちたる一片より縦五尺

六寸厚六寸余なり此櫺は公在國の頃遊藝有りて此櫺は數度製せられ

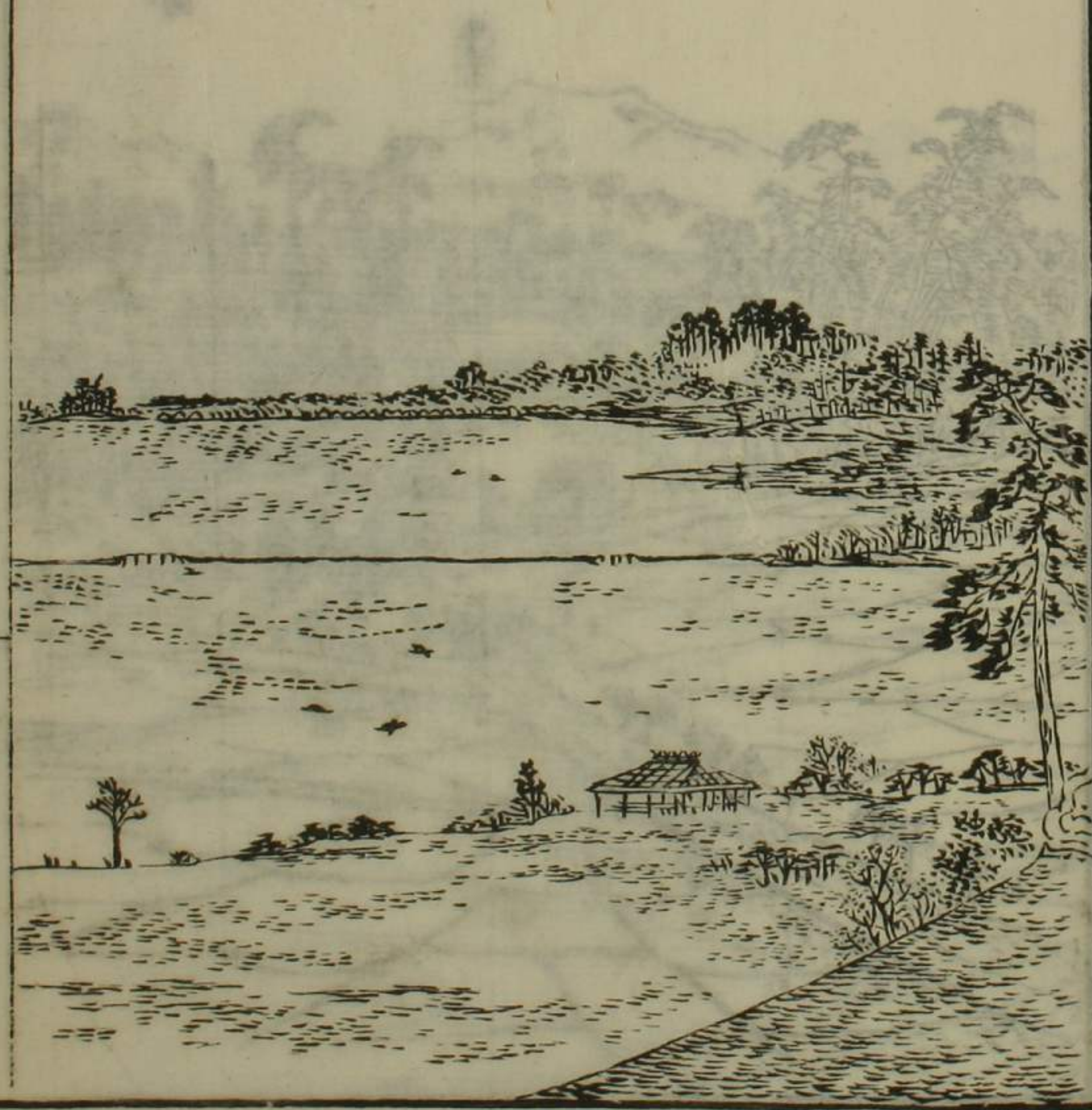
今常磐神社神樂殿に有り此窓は用ひられしより數ハ

是なり國説第二卷より引たり此室南改正面より三方より櫺

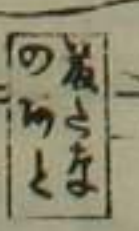


川田 剛
明公偉略見遺蹤
營得菟裘亦要衝
碧水涵天連大海
青山排闥聳双峰
層樓曲榭臨平野
怪石奇巖倚古松
是雖一班他可識
雄藩此五萬提封

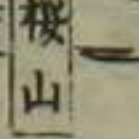
樂壽樓上より千湖を
望む圖



其六
乃



其六
乃



櫻山

一より白雲岡し

重之

輕風澹日弄青陰
先雨來看櫻樹林
身入花中花不見
雙眸只覺白雲深

戸牧久
櫻山咲のさうりハ

まきしる

松乃みさる

免考りき
うね

見和村

築波乃

柳陰水

小渡川



戸村義暢
暮れハ又

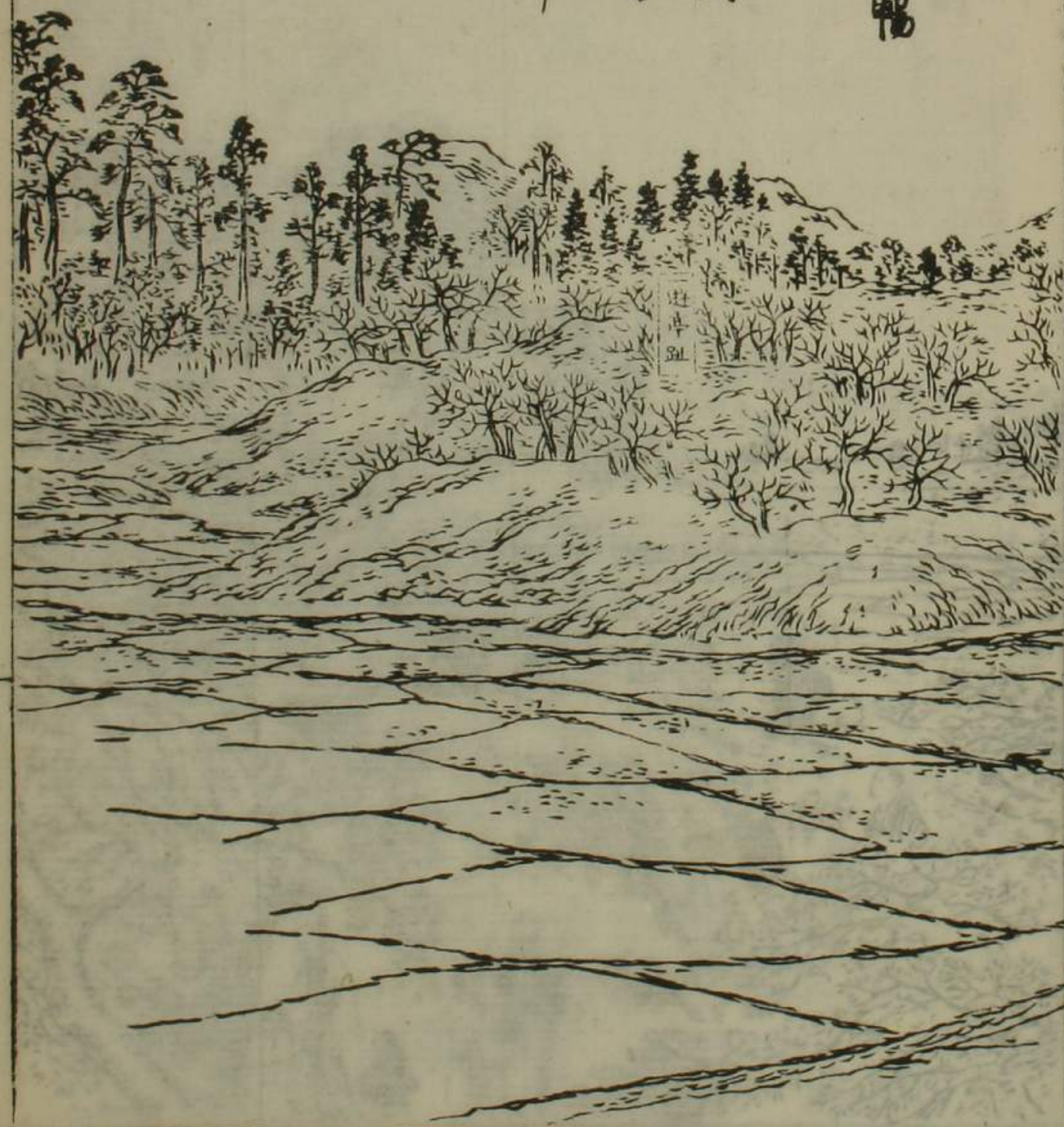
咲つゝ

花の嶺山

い川をうきまに

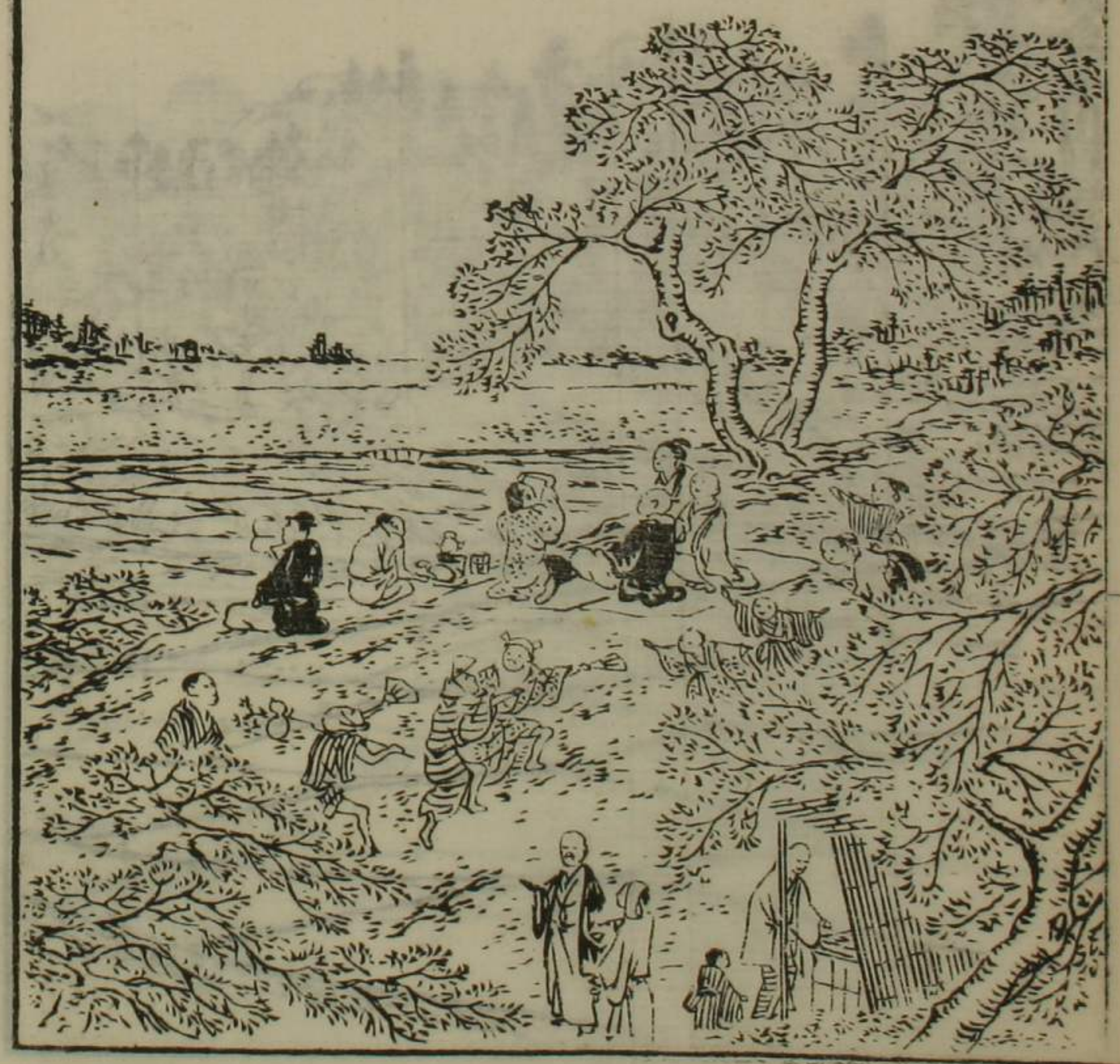
そらうえ

いそまき



櫻山春興

津田信存
萬株歲々玉盈枝
管領春光復有誰
草茵閑坐香風夜
正似君恩煦耆時



小林至別

うきさきも
こころも
月影ふりて
うきさきも
うきさきも



戎役く南面兼塵の上小樂壽樓の三字を草跡に書れり
 扁額を掲けり是れ公の筆蹟なり正室の北入側戎
 隔く二小室有り是戎休息所とい此所の厨のうへより
 杯盤等戎直ち上へ約するうへ小鉤繩様のその戎役
 く是其運搬の勞戎省くれりそのゆへ公の意匠は出る
 を此なり抑此樓高陵のうへ又三重は組立する高さ三拾
 尺の上へ聳へ欄は凭ては顧まれ山河皆眼下より凡園
 中各所の眺望集めては大成せしむるなり
 亭中の桐戸襖の類は當時府下の畫畫は聲のり人々よ
 令せりめられし又真假名平假名片假名或
 ひは紐鑑ふのをこれに桐戸に枚に記し載て縁歌の
 資とて平仄の韻字集めて詩作の料に充たる是等



何陋庵の待合
 中へ塗込る
 しのなり中へ
 差日さ一臺尺
 に寸鉄を文字
 用下板は檜の
 唐木色付なり

茶說

人史於禮不可一日離也夫則邦國之
經綸小則閭閻之細務有禮則治無禮
則亂雖小技亦然余暇日為烹飪止技
其中自有禮節廢之則事亦不可行也
而其可取者三焉可舍者三焉以易得
之器與難得之寶比薰而不取者所以
示以富貴交貧賤也其調麤食為美味

者所以示以不肖為賢也其聚古物已
玩之者所臥示慕古也若夫垢清器傷
全物以質古製者教民為也人箸碗盞
博也千金果菜魚鳥競致珍異者教民
奢也品誇器什極口贊揚者教民諛也
舍此取彼斟酌以用之可謂善行茶禮
者也歟金玉之為至寶芻豢也為美味
人之所同好也我則不然臥凡木為具
以茅簞為羞矣富貴之為尊貧賤也為
卑亦人之所同然也我則不然貴賤共

席而不相褻促膝劇談雖臣子相伍焉
 是數者吾技之所歎也貢亦雅和而不
 流君子之交也孔子曰禮與其奢也寧
 儉雖小技其庶幾乎

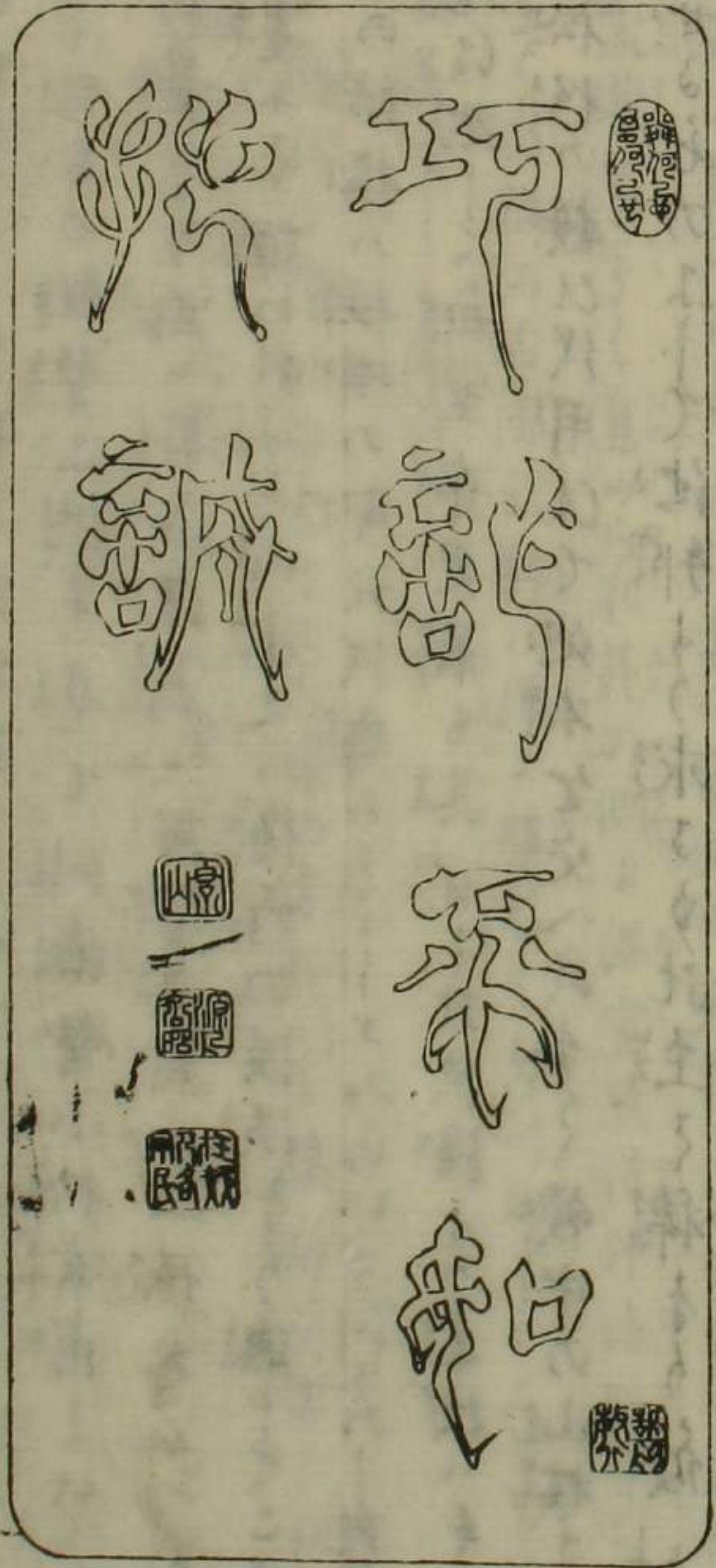


茶說

縱壹尺三寸橫貳尺七寸五分檯板唐末色竹文
 字彫下有り側レに分の一ををりく縮寫レ

巧詐不如拙誠

茶對茶說と同一待合の壁中ニ塗籠するものなり
 縱三尺壹寸横壹尺貳寸五分檯板小レて文
 字肉合彫有り



ハ舊藩士名越敏樹松延道園の兩筆なり又水戸家所
藏の中より古色紙短冊數拾枚撰ひ出して桐戸に收ふ
摸一好古の觀覽ふ供せども同藩醫小松玄甫といひし
人の筆なり画ハ萩谷遷喬三好守貞岡田三孫等につれ
水墨ふく揮ひれり山水又ハ梅竹の模様なり總じてこの
亭の結構ハ柱礎の堅死代専ら一工みのいづれに死を
加へ然して毎室布置最も其宜し死得たり本棧ハそ
て松栢の類ハ代用ひて他本を交へる多し領中の山林
出せるものふして他邦より求るもの此至る稀なり彼上
代の質朴なるふ儼ハせられ華美虚飾代をくえられ
ハ起工の始より豫め其費用代概算し工竣るふ及ひ
る猶衆分の餘額有り故に半ハ窮民代賑ひし半ハ園

中修理の料は充らる又苑中の樹木を自然の生長に
隨ひ敢て矯揉の酷しや加へ能其生代保ち一枯朽
ふいづるの患ひなく繁る枝葉茂りて緑の色深くおの
庭塵の趣ハ代表し雅客のころ代慰むるは是れり又種
の盆栽を多く集められ苑の側は温室代設け培養せられ
り白樺の古木式鉢ハ殊に勝れく是れりく多く
賞美せしと聞けり

棧上は通じ階のなをより東の方斜に橋廊を架し直ち
ふ奥殿に到る此處ハ西より東北に折廻らして八室は已に
東の二室を正室とし南に向ひて入側有り北は續々式室
奥裏面所より尚北に續々書院表裏面所有司の詰所并
ひは玄關等を有りたる年代迄ハ破壊多し代々撤毀ち

修補の費用幾多減に又西の一棟ハ厨より総板敷なり
是より西ハ茶室に通ひ又同所の西北隣りて長局式棟在
りて中門の遙より連りし是も同時より除け今杉林と
なり

二李咲の檼 興殿の庭并ひは階樂園の碑石より南の方苑中より
り花片尋常のものにして色純白なり春冬兩度ハ花茂
茂く就中十月茂をとり多し故ふ十月楓ともなり
是ハ舊藩士久米某の邸中より移されしものと又
貞享元録の頃大和芳野の楓苗茂七面の境内に植られし
或書に見えり是今好文亭東板敷の前なる楓の大樹なり
と云へり又仙奕臺の遙より松樹ひと根ハ駿州三保の松原羽
衣の松苗茂るされしとあり
此外園中の小松ハ南園行方郡淺村より
の松の実生なる由云傳ふ

櫻山

一小白雲岡より隔く偕樂園の西武町并茂隔て見和
村の地ハ有公園の附属より東西凡式百間南北八拾間の
岡ふして一面ハ芝生なり天保中偕樂園茂開れし時此
ハ楓樹數百株茂る遊觀の地となり弥生の初旬
より咲えり満山雪と泳え雲と見紛ふより貴賤打
群るるふ逍遙一時の奇觀なり

一遊亭 櫻山ハ偕樂園ふ次る絶景の地なり眺望粗相似
より故ふ公より此處ハ園茂開れんとせられし地
域の使隘なる茂を今の地に改めらるると云され此所ハ
もけやうなる亭茂役けり休息所とせられ一遊亭と号
けらる後故よりて廢せり

玉龍泉 一ハ柳陰水とをいへり櫻山の北の崖下より徑式間



玉龍水 又柳陰水より

許の園死池の形ち伐造り内ふ大石を居へ鉄管伐仕込み
 其中より水伐噴出以高さ一文餘ふ到る水源ハ岡の南
 一町むよりふ在り公固より水理ふ精一嘗て雲霓機集
 と云へる書伐著ハ一領中ふ領ち與へる灌漑の用は供
 其水ふ乏れた村落ハ此用法よりひる最も益をば
 とり此噴水も亦公の意匠より出るとのなり

丸山 槇山の東に續れり園死丘よりて東西に拾間南北拾
 五六間往りて柳槇松海棠の類ハ伐植り此丘ハ佳
 寛文年間水戸義公緑が岡ハ高枕亭伐設けさせられし
 折この所より小堂伐営み陶淵明の木像伐安し淵明堂と
 号せ又壁障ハ狸々の画伐貼せり伐をく狸亭酒星堂
 と稱へられしなり

此丘の北小湊川に架せる橋樹りて今も狸
 樹と云ふと云ふ通ふ路あり故の名なりと云



吉田令世
 秋のふりそ
 秋風を
 松のみどり
 やまのや
 ま



大場如軒
 あふれんば
 仲の月の
 まりけ
 玉乃玉萩
 秋萩
 涼夜蛩聲徹曉喧
 萩花叢裡不繁
 知儂亦訴秋光早
 要使遊人探樂園
 園中の萩

園とち子こ云いふ水戸の儒臣にうじん吉弘きちひろ元常げんじょう通称佐々木子常通称佐々木子常初名玄人水戸侯ふ仕へる儒臣儒臣一日同僚と共ともに持成もちなりで會あひひ元常げんじょう思おもひら彼管公かふんこうの持成もちなり代聞しろするふ菊きくは題だいしその梅松ばいそう成賦なりしある持成もちなりより多おほしはれむ相公さうこうの持もちふ

不是秋江煉白砂 黄金化出菊叢花

微臣把得簾中滿 豈若一經遺在家

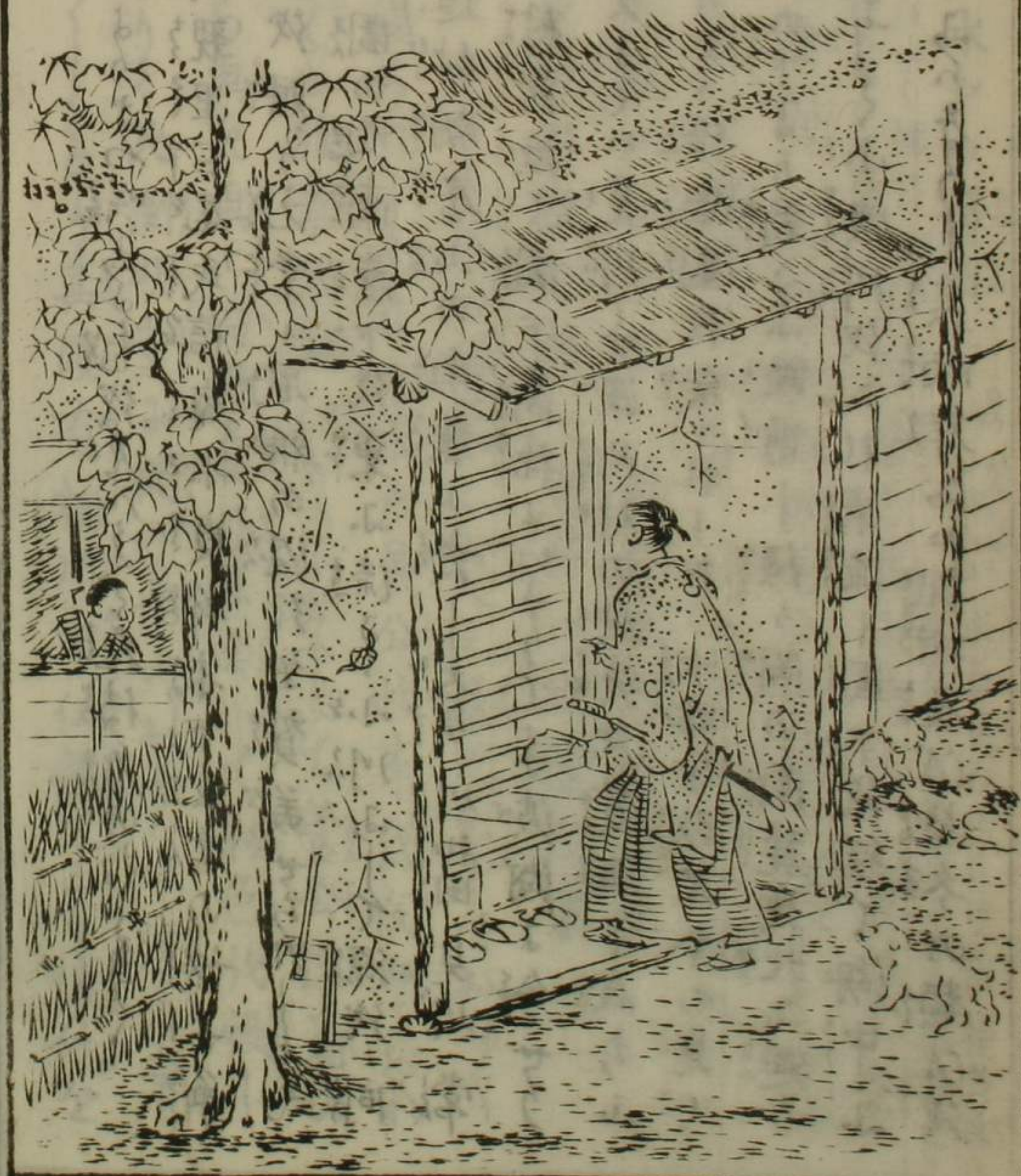
此句意をとりて相公採菊と云へる題成だいなり出いておのく佳句を得られしとあり水戸義公ぎこう此事成聞このことなりおられ元常げんじょう優よくくも雅事みやうじ代好しろむものうなとて管公採菊の圖成親ら画えに画工えこう狩野養朴しゆのやうはくふ令しるどて彩色しき成役なり表装成りし此瀧明堂たきめいどう子掲あきけ祭式さいしきありて後元常ごげんじょうふ賜たまりしとあり其頃有栖川幸仁親王きしんしんおうより懷紙かいしを

ふりふ

いづれよりよみ候ふも成なりんて花は庭のむくき

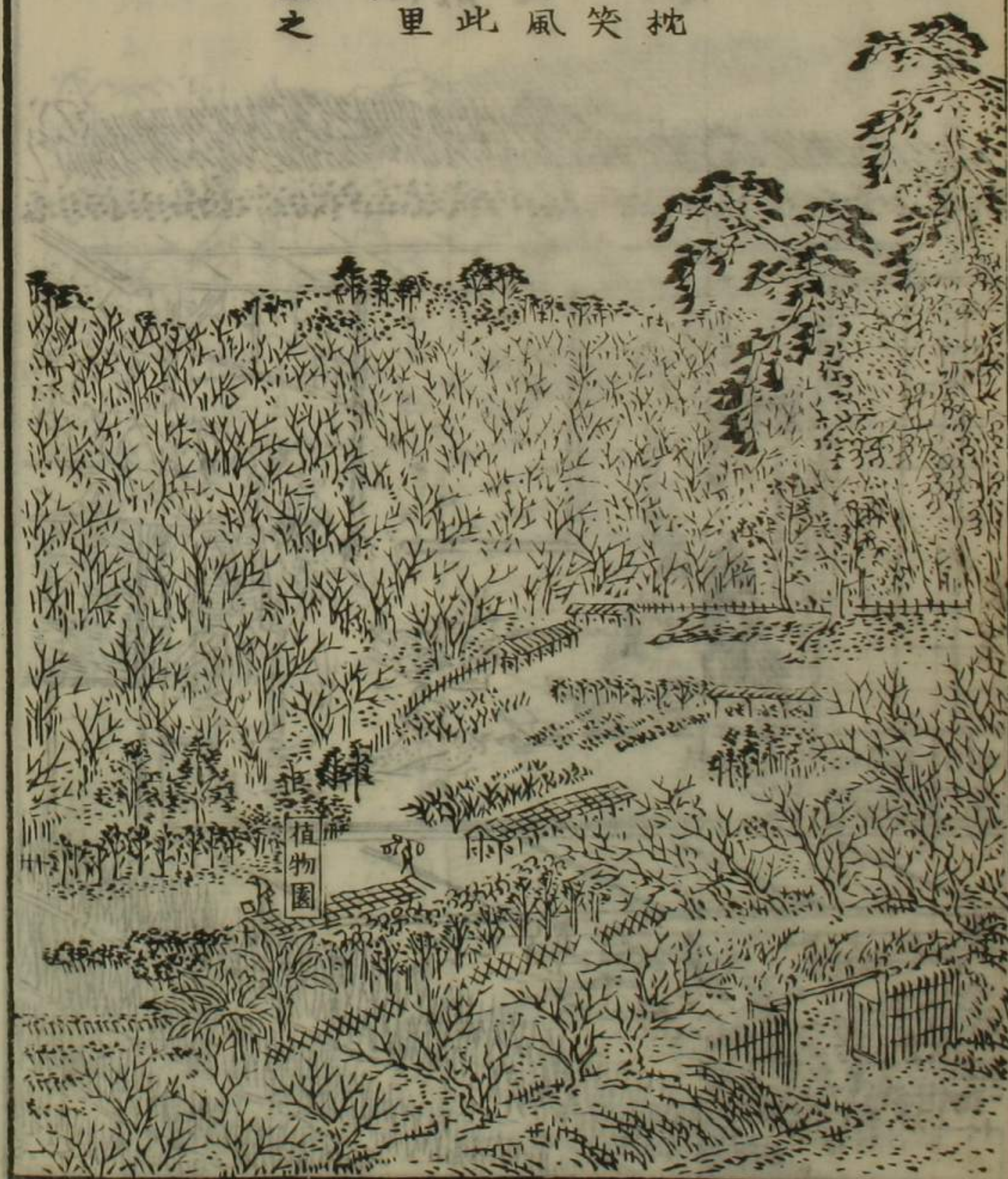
此外大友親里石尾氏信庵木貞幹木下玄雲の諸子争つて持成もちなり贈り元常げんじょう風雅の渥おほけを賀が美せられしと櫻川えいがわ階樂園かいらくえんの西南崖下しんなんがふち成東なりふ流ながる小川せうがわより源成げんなり同郡池野造村朝房山の南麓なんろくふ後ご一いつ大只川おほしづがわ和因わいん見川けんがわ常磐の教しやうばん村成むらなり経て園下高橋おののけよりりてふ波湖なみうみは會あひせり天保の初はつ欠けまてハ見川けんがわ子波なみ兩村りやうむらの地先ぢさき成貫流なり直ちふ湖中うみなかつふ入いりし借樂園せうらくえん成閑なりれしあり水路すいろうを改あらため今いまの見川けんがわ村不動院むらふどうえんの下より新あらたふ疏通すうたうし緑きよう岡おかの南麓なんろく成北なりふ廻り丸山の北きたより小渡川せわたがわ成入なりれ東流とうりゅうし園下おののけ成経て湖中うみなかつふ落おちる事ことふなりし其兩岸そのりやうふ楓樹もみぢ及び款冬くわんとうの類るいは成

水戸の儒臣
吉弘九常
公探翁の題
よて同僚
集兌待會
催ハ事校
ニ奉一



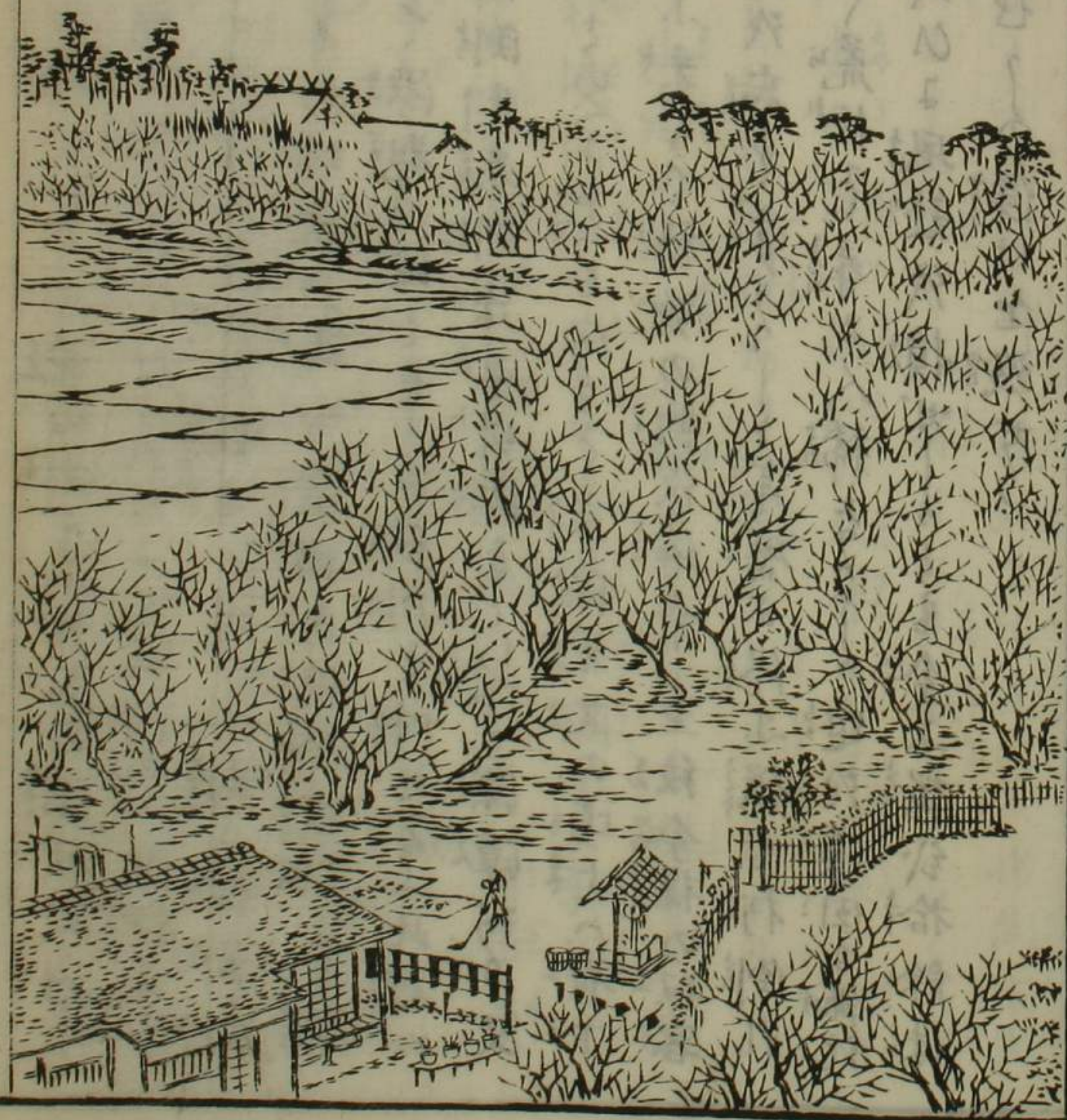
梅林

橫斜疎影枕
仙湖幾朶笑
凝冰雪膚風
信一番吹此
畧暗香千里
使入蘓
佐木直之



睦子

夢をみる
ふたつと我
新山 まなれ
すれ
君へ書きたる
花北也
替毛
忠子
ふるも梅の林に
おれそえ
こりて白く
うさ乃
伊とう勢



多く栽て竜田の錦をかがし花の影を井出の俤げをうり
騷人の詞藻茂速る資けといせられ又此川上一里許より
て見川村の地ふ兩岸ふ古本の極多くありて頗る佳景の
地なり元禄九年の頃水戸義公當國真壁郡横川より横
の苗本茂移して游觀の地とせられ横川と呼せぬ此町ハ
川幅廣く膳棚倒牛巻洲弥平次洲をとりて深潭あり又
菖蒲川蛙の杜といふ處も有りて享保元文の頃とへ府下
の騷人多く此ふ来りて待歌の興茂催ふ三弦今様の狂客
へ酒宴は歸路茂忘る多うり一年歴る終ふ横も朽倒れ
其地造も甚く荒極る尋る人稀なりて近於頃因は鐵
烟ふくえして大ひは風致茂損ぜりとも今ふ横式拾餘株
有りて僅ふむりの俤げを残せり

梅園 表門の東より常磐神社境外より凡百八拾間幅凡
そ六七拾間程よりて尽く梅林なり其数凡そ五子餘
株ふ及ぶより其地園下横川の北岸より吐玉泉に到る
の間崖よりて式百餘株有り又常磐村元山町の出口
表門の前通り迄道の左右ふ植ふを此百餘株なり又
今の常磐神社境内外の地にも舊借樂園の一郭内にて
梅林なりよりて初免園中一万余株茂植られ一時培養
茂欠れより毎年枯朽し今に至り其半は茂減れといふ
公稚然より梅花の清茂愛し後領中は令して多く梅樹茂植
させたる天保九年大ひは文武茂擴充せんため水戸城の外郭
内ふ弘道館茂設け又梅樹五子株茂くらり初免封内梅樹
甚ふ乏より此ふ至る戸毎ふ其花茂見る事茂ほよりこれ

其實茂貯え多々非常の用ふ充らるゝの意なりとて
 嘉永年間のこととや公近江二人茂崎陽は遣はりて
 氣機閣の結構を洋人は質聞せられ二人其事あり
 て帰途大宰府の菅廬茂絳一飛梅の小枝茂携へ来り
 る之茂公ふ呈を公大ひは感賞一江戸駒籠の別業は裁
 培せられしは是公の平生風雅茂嗜するの一端く

常磐公園攬勝圖誌上巻畢



